파2K71

39
0.8

大槻憲二著

# 神經戰對策

東京精神分析學研究所刊

393.3
O 89
(5)

大槻憲二著

# 神經戰對策

東京精神分析學研究所刊

昭和十九年十一月十六日

973
269

# 序文

本書述作の目的は、敵米英の神經戰術に引掛からないやうにすることにあるのは申すまでもない。そのためには、まづ敵の神經戰術の本質的な特徴を科學的に闡明すると共に、他方に、その神經戰術に引掛かる心理そのものを調整することが必要でなければならない。

戰爭は結局、戰意の問題である。勿論、武器や經濟や物量の問題でないとは云はないが、その根抵をなすものは戰意である。戰爭目的の確立である。その點に於いては我等は既に敵に勝つてゐるのだ。然るにその勝つてゐる筈の戰爭を心理的に動搖させようと云ふのが敵の謀略の中核である。そのために彼等はその陣營の中に、「心理戰爭班」（ＰＷＢ）なるものを設置していろいろに研究し實行しつゝある。そこのところは流石に殊勝であるのだが、併しその心理戰爭班なるものゝ實質的內容が誠にお粗末であつて、不燃性の紙片に投降勸告文を記してそれを砲彈の中に入れて敵陣中に發射すると云ふやうなことである。心理戰爭とは名ばかり、實は兒戲に類する威嚇や誘惑である。それでもイタリー戰線では多少の效果があつたらしいが、それは抑々イタリー軍中に投降の願望の盛んな者（戰意なき兵卒）が多くゐたと云ふことを條件としてゐるのであつ

て、皇軍に對してはさう云ふ小細工をまだ弄しないらしいのは、わが軍の戰意の熾烈なことを知つてゐるためであらうか。

從つてわが國は神經戰術といふやうな謀略や小細工を用ゐる必要がない。そんなものは戰爭目的の確立してゐない軍隊の溺れかけて摑む藁みたやうなものだ。わが國軍はみんな藁を賴りにする必要はない。思想戰のみ必要であつて神經戰術は不用である。東條首相は十九年度頭初の議會演說で、大東亞宣言は「略」ではないと喝破したが、私も頗る同感である。

併し思想の確立、つまり戰意は萬人に於いて共通的に固定不動ではない。と云ふのは、いくら日本人でも總ての者が平等に精神的に健康ではない以上、已むを得ないだらう。健康だと自任してゐる人々も、存外不健康な考へ方をしてゐて自ら氣のついてゐない場合もないとは云へない。否、確にさう云ふ場合があることを、現に本書中に指摘しておいた。そこで私は本書中で、萬人の精神の健康化と云ふことを先決問題として論考を進めておいた。

前線銃後の精神指導に心理科學的方法の缺如してゐることを、私は常々嘆いてゐるが、本書がその缺を補ふ一助となれば幸である。

昭和十九年七月

著者識

## 『神經戰對策』內容

――『內容』終――

# 第一章　神經戰對策

## 一、神經戰とは何か

神經戰、神經戰と喧しく云ふが、それは一體どう云ふことなのであらうか。常識的に云へば、それは相手國民の神經を變調にして戰意を失はしめることにより、戰はずして、或は戰ひのための自分側の勞力や損耗を節約して勝たうとすることである。常識的に定義すると右の通りであつて、別にむつかしいことではないやうであるが、その神經戰に勝ちぬくためには、その神經戰なるものをもう少し科學的に考へ直してかゝる必要があると思ふのである。近代戰に於いて物質武器が科學化せられてゐるやうに、精神武器も科學化せられてゐなければならない。神經戰は、つまり、精神武器の戰ひであつて、現在の戰爭ではどこでもこの精神武器の科學化のために、何れもみな相當の苦心をなしつゝあるのである。

さて、右の常識的定義を細かく研究して見ると、前半は神經戰の方法を明かにしたものであり、後半は神經戰の目的を判然とさせたものであることが分る。どうせ神經戰は精神的武器に依

る戰爭であるから、精神的な勝利を目的とするものであることは申すまでもない。精神的勝利とはどう云ふことか。これを哲學的に宗敎的に云へば、いろいろ抽象的な說明も下され得るであらうが、私は心理科學徒であるからやはり科學的に說明して見たい。心理科學的に精神的勝利を定義するならば、戰爭と云ふ心理エネルギーの一大消耗行爲に於いてなるべく我方のエネルギーの消耗を合理的にし、經濟學的に節約し、併し必ずしも出し惜みするのではなく、出すべきところには重點主義的にどんどん出すが、出しても始まらないところには鐚一文も出さないやうにし、遂に相手がそのエネルギーを蕩盡させて了つた後にも此方にはなほ澤山の、或は幾分の餘裕があれば、それが精神的勝利と云ふべきものであると云ふことが出來るだらう。現代戰は消耗戰だと云はれてゐるが、それは武器や人的資材や補給に就いてばかり考へられてゐるやうであるけれども、その根本は實は心理エネルギーにあることには、人々はまだ殆ど誰も氣付いてゐないやうに私には思へてならない。いくら武器や人が在ても心理エネルギーが消耗し盡されたら、もう戰爭は出來なくなるのである。現にシンガポール陷落の場合の如きも、敵英國側は人員に於いても武器彈藥に於いても我方よりは遙かに優勢であつたのに、その精神的エネルギーの蕩盡のために遂に降伏の已むなきに立到つたのである。それ故に我々は現下の西南太平洋に於ける先方の物的エネルギーの優勢に對しても、必ずしも物的見地にのみ囚はれて、心配することはないのである。

もしそれを心配し過ぎるやうならば（固より楽觀すべきではないが）それこそ先方の神經戰術に罹りつゝあるものと云はなければならない。

## 二、神經戰と心理エネルギー

それでは神經戰に於いて自分側の心理エネルギーの消費を合理的にするにはどうすればよいかと云ふことが、次に問題になるであらう。その問題はつまり先に擧げた定義の前半の內に含まれてゐる問題である。右の定義に於いて、その前半は神經戰の方法を明かにしたものであると自ら解說しておいた。神經戰の方法は自分側の神經はなるべく剛健にし、敵側の神經はなるべく變調に病的にすることに外ならないが、神經を剛健にしたり變調にしたりするには如何にすべきか。

神經を剛健にするとは心理エネルギーを豐富にし、その消費の方法を合理的にしてそこにエネルギー經濟の破綻を見ないやうにすることであつて、敵の神經の變調を獵らすやうにするとはそのエネルギー破綻を惹起せばよいのであることは申すまでもない。

併しエネルギーの消耗だとか破綻とか合理的消費とか云ふと、それ等は大抵みな經濟學上の術語であるから、如何にも物的に、量的に聞こえて心理的活動の考察には似つかはしくないやうに諸君は考へられるであらう。尤である。私も勿論、心理は量的に、經濟學的にのみ考量すべきも

のではなく、そこに力學的な考へ方、或は質的な考へ方も這入つて來なければならないと云ふことを氣付いてゐないのではない。併し量的な考へ方が全然不可能と云ふわけではなく、もしそれが心理活動の一面を最も科學的に考究するための一つの（唯一のとは云はぬ）方法であると云ふ學問的な限定に對して十分な自覺さへあつてするならば、量的な考へ方を心理活動の上に加へるのは差支へないどころか、寧ろ必要でさへある。

そこで神經戰とは結局、心理エネルギー經濟戰であることが大體明かになつた。併し心理エネルギーと云ふものが如何にして發生し、增產せられ、蓄積せられ、使用せられ、消費せられ、消耗せられ、或は腐敗し、浪費せられ、枯渴し、破綻し、萎微するかと云ふことが判然としない以上は、神經戰の意義や內容は未だ常識を出づること僅かに一步の範圍に停つてゐることになるので、まづ神經と心理との關係から明かにしてかゝらなければならないが、抑々、神經とは何かと云ふことがまだ明かになつてゐない。

## 三、神經と心理

神經とは、生理學の書物に說いてある通り、突起を具へた細胞であつて、それ等の極めて多くが互に絡み合つたやうになつて、全身に亙り蜘蛛の巢のやうに張り繞らされてゐるものであつ

て、云はゞ人間内の電線のやうなものである。電線に中央電信局があるやうに、神經にも神經中樞と云ふものがあつて、それ等は腦髓や脊髓にあることは、これまた生理學を何らかの程度に學ばれた諸君の悉くが常識として知つてゐられる通りである。

併し神線戰と云ふのは、何もこの細胞組織を神祕的な魔藥を以て痲痺されることではない。敵の心理を攪亂し、味方の心理はなるべく安泰にしておかうと云ふ努力である。で、心理は神經から出てゐるのかと云ふ質問が出るに違ひない。左樣、それに相違ないと醫者（生理學者）は答へる。彼等としてその答へは恐らく正しいであらう。何となれば彼等にとつて肉體以前に心理はあり得ないものだからだ。併し、その神經は、殊に中樞神經は意志の命令に依つて活動を開始する筈のものであるのだから、意志の存在以前に中樞神經があつたと云ふことはをかしくはないかと反問せられたら、彼等も恐らく多少は困るであらう。主人が居ないのに雇人だけがゐると云ふことは考へられない。併し主人も雇人も共に人間だ。主人として雇人として存在したのは同時であらうが、その主從關係の發生以前に人間關係が存在しなかつたとは考へられない。丁度、そのやうに、神經と心理（意志）とはその發生は同時であらうが、その發生を動機する意志（超個人的な意志、心理ならぬ心理、つまり無意識心理）はそれ以前に存在したに相違ない。

で、人間の心理は神經に必ず依存するものである。神經のない心理を考へられないことは、火

のない煙を考へられないのと同じである。併し神經さへあれば必ず心理があるかと云ふに、必ずしもさうでないことは、宛も火があつても必ずそこに煙があると云へないのと同じである。電信があつても必ずしも常に通信があるとは限らないと同じである。神經は心理と云ふ聲が傳はり來る電線見たやうなものだらう。電線がなくとも遠くの聲は確に存在してゐるのだが、それがなければ、或は毀れゝば、聞こえて來ぬから、殆どなきも同然となるのである。

神經戰は電線を破壞して敵方の電信隊の活動を封ずることに依つて全局の條件を自軍の方に好都合にしようとするやうなものである。否、實際はもつと重大な意義を帶びてゐる。電線があつて始めて通信が可能となるやうに、神經があつて心理は始めて意識化せられるのである。で、もし神經がなければ心理は未だ心理とは云へず、盲目の意志、卽ち無意識と呼ばれるもののまゝに殘つてゐるのであらう。

それ故に、神經戰と云ふのは、神經を破壞することに依つて、敵方の無意識的意志を破壞することが目的であると云ふことになる。神經を破壞しなくても、無意識的意志をさへ破壞すれば、神經も自ら破壞せられるのであつて、從つて神經戰の窮極の目的は無意識的意志を破壞してそこから湧き上り來る戰意を撥無しようと云ふことにあるのだ。

## 四、心理エネルギー製造工場

人間の心理は結局、無意識の土壤に深く根差して意識の地上に幹を立て、精神の天空に高く枝葉を聳えしめてゐる巨木のやうなものであることが明かとなつた。幹や枝葉を斬り落しても根は枯れることがあるが、根を斷てば幹や枝の枯れ落ちることは一層確實である。戰爭は昔に逆のぼるほど枝葉の戰爭、或はせいぜい幹の戰爭であつたが、今日の戰爭は根の戰爭である。幹や枝の戰爭でもあるが、それと共に根の戰爭である。それ故に有形的には銃後（卽ち國民的の根）を襲はうとしてゐるし、無形的には思想や神經を攪亂しようとするのである。銃後は前線の神經であり、心理であるからである。

植物のエネルギーの大部分（全部とは云はぬが）は根から吸上げられるやうに、人間の心理エネルギーもその大部分は無意識から噴出するものであつて、決して幹の地上の生え口（意識）から出るのではない。人間の心理エネルギーも神經からばかり出て來るものではなく、全身から、否、全身に依つて象徵（代表）せられてゐる生命、卽ち無意識から發生するものである。

では、無意識と云ふところはそのやうにエネルギーの豐富に貯藏せられてゐる庫なのかと、人々は訊くであらう。左樣、そのやうに豐富なところであるが、併しそれを貯藏庫のやうに考へる

ことは間違つてゐる。さう云ふ靜的な、保存的なものとして理解せずに、もつと動的な、創造的なところとして理解せねばならぬ。それは金持の倉庫ではなく、寧ろ勤勉なる勞働者の工場として理解せねばならぬ。金持の保存的倉庫ならば、追々に消費せられて段々心細くなつて行くが、無意識はもつと活動的で、生產的なところであるから、心細いことはなく、却つてもつと生々としてゐるものである。よしんば製品はあまり澤山積上げてなくても、やがて追々に製造するからと云ふので、少しも消氣ないのが、眞に健康な活動家の態度であるが、丁度そのやうに、無意識は本來悲觀と云ふことを知らぬ筈のものだ。極めて樂觀的なものだ。無論、人間としてはいつも樂觀ばかりしてゐるのが健康と云ふわけではなく、理由のある悲觀ははやはりすべきが當然であるが、併しそれは人間に意識が發生したからであつて、無意識自體としては（それのみで生きてゐる人間は實際にはないが）常に樂觀的で、積極的で躍進的であるべき筈のものなのだ。意識の悲觀と分別と躊躇とに對して無意識の樂觀と躍進と熱情とがあるので、こゝに複雜な味のある人間らしい人間が出來上るのである。

## 五、心理エネルギー製造機械

ところでその心理エネルギーは如何にしてそのやうに豐富に生じ來るのであらうか。それは始

めからそこにあるだけ貯へられてゐて、それをチビ〳〵と消費して行く内に漸次に減少して行つて、最後の一滴までなくなつた時、ないが意見の纏じまひで死んで行くのだと云ふやうな、そんな單なる貯藏庫式のものでないことは前にも說いておいた。更にまた親の遺產を銀行に預けておいて、それの利子よりも餘分に少しづゝ喰ひ減らして行き、遂に元利ともになくしてお終ひと云ふやうな消費者的なものではない。もつと生產者的のものであると共にもつと積極的なものである。その積極的な生產力は何處から生じ來るかと云ふに、それは屢々私が說くやうに生死兩本能の調和から生ずるのだ。東洋哲學的な表現で云ふなら、陰陽の中和と云ひ換へてもよい。生死兩本能（陰陽）は元々正反對の二種の傾向である。それが不思議に調和を得て、同じ傾向のものの合體よりももつと緊密な力を發揮し、生產（むすび）の現象を示すのが宇宙及人生の姿である。宇宙に於けるその顯現は地球が遠心力と求心力との調和から公轉自轉の一大運動を創造してゐることであり、人生の顯現としては生死兩本能の大調和から永遠輪廻の大實相を示してゐることである。この兩現象間に因果關係がある。

これは實に永遠に盡きることなき大運動であると共に大創造である。この道に立つものにとつては個體は亡びても生命は亡んでゐないのである。これは負惜みや詭辯ではない。個體はどうせ亡びるにきまつたものである。亡びるべくして亡んだ時、その死は同時に生である。それは出來

るだけ長生きしてその間に最大可能量の仕事を総へて死んだ人の死が有意義な大往生であるのと同じだ。それは實に芽出度い死だ。犬死は、いくら華やかであつてロマンティックであつても芽出度くはない。

心理エネルギーはこのやうに生死兩本能の拮抗的大調和の中から不斷に創造、蓄積、消費、再生せられるものだ。源泉滾々晝夜をやめず、これは本來、敵の謀略的神經戰術くらゐで枯渴して了ふやうな頼りない性格のものではない筈なのだ。そのない筈のものがありさうになるのは如何にしてゞあらうか。

## 六、物的エネルギーと心的エネルギー

前節で、私は心理エネルギーのことを種々の角度から問題にした。こゝで心理エネルギーの質的價値、卽ち優劣の問題に就いて論じようと思ふのであるが、その前に物的エネルギーと心的エネルギーとの關係に就いて一應の言及を試みておきたい。

エネルギーとは本來、物理學の概念であることは申すまでもない。物理學に於いてエネルギーとは、何らかの物的な力が仕事をなし得る狀態にある時を云ふのであつて、語源的にもエネルギーとは「仕事」と云ふ意味なのである。物體が仕事をなし得る狀態にある時、その物體はエネル

ギーを有すると稱せられるのである。そのエネルギーには二種の別があつて、風や流水のやうに物體が運動しつゝあるがために有してゐるエネルギーを運動のエネルギーと稱し、高所にある水や石や杵のやうに、位置のために包含せられてゐるエネルギーを位置のエネルギーと稱するのである。然るに地球の太陽からの遠心力はつまり運動のエネルギーに外ならず、求心力は位置のエネルギーに外ならず、そして地球の遠心、求心兩力の生物に遺傳したものが生死兩本能に外ならぬと私は考へてゐるのであるから、人間の生の本能は云はゞ運動のエネルギーの變化した形であり、死の本能は位置のエネルギーの變化したものに外ならぬと云ふわけになつて來る。

さうしてエネルギーがエネルギーであるためには即ち力がエネルギーとして仕事をなし得るためには、「之を遮る他の物體の力に抗して仕事をするものである」と物理學で論じてゐる通りに、何かこれを遮るものがなくてはならないのだ。「これを遮る他の物體の力」と云ふものは、結局は、運動のエネルギーに對して遮るものは位置のエネルギーであり、位置のエネルギーの場合は運動のエネルギーであると云ふことになると思ふのである。つまり、運動のエネルギーは常に位置のエネルギーに依つて妨げられてそこに仕事が生ずるのだと云へると思ふ。これを證明することにさして困難でないだらう。例へば、汽車が別の汽車に追突して後者を破壞した(仕事をした)とすれば、その仕事は後者の汽車の有する位置のエネルギーに「抗せられた」ためであると云ふ

ことになるが如きである。

生物、殊に人間の心理エネルギーも全くそれと同じであつて、生の本能、死の本能の何れか一つでは仕事（子供、物資、文化）は生じない。死の本能は生の本能に妨げられて自己破壊作用をやめ、生の本能（保存の傾向）は死の本能（安定への傾向）に妨げられて單調持續の作用をやめ、自分の代用品（子供）を生み出すことに依つてその矛盾の解決を成就するのである。それは丁度、地球の遠心力がその求心力に妨げられることに依つて遠心力たることをやめて地球の公轉自轉と云ふ不斷の反覆的な仕事をなしつゝあるのと正に同じである。

## 七、水車の仕事と人間の仕事

このやうに、エネルギーと云ふものは一つの力が他の力に依つて妨害せられるところに生ずるのであつて、何らの障碍のないところ、あまりに平穩無事なところに仕事は出來ないものである。エネルギーのこの性質を最も適切に表現してゐるものは二宮尊德の次の言葉である。

「人道は譬ば水車の如し、其形半分は水流に逆ふて輪廻し、丸に水中に入れば廻らずして流るべし、又水を離るれば廻る事あるべからず、夫佛家に所謂知識の如く、世を離れ欲を捨たるは、譬ば水車の水を離れたるが如し、又凡俗の教儀も聞ず、義務も知らず、私欲一偏に著するは、水

車を丸に水中に沈めたるが如し、共に社會の用をなさず、故に人道は中庸を尊む。水車の中庸は宜き程に水中に入て、半分は水に順ひ半分は流水に逆昇りて運轉滯らざるにあり、人の道もその如く天理に順ひて種を蒔き、天理に逆ふて草を取り、欲に隨て家業を勵み、欲を制して義務を思ふべきなり、」

こゝに水と水車との不卽不離なる關係に於いて、卽ち或る力が抵抗に會ふところにエネルギー卽ち仕事の能力が生れると云ふところは、さうしてそれが人道を彷彿すると云ふところは、實に我が意を得たる考へ方と申さねばならぬ。さて、その不卽不離なる關係とは何かと云ふに、それは水中に沒する水車の圓輪の度合ひ如何と云ふことに外ならぬ。全然水から離れて了つては問題にならぬことは二宮尊德の云ふ通りであるが、併し一分か五厘位漬つてゐるのではこれとてやはり問題にはならぬ。少くとも三、四寸、又は一尺位は漬つてゐなくてはならぬであらう。その深さは水車の圓周の大きさ、水車の厚さ、卽ち水を汲ふ水車の小桶の幅、水流の速度、傾斜の角度などに依つて決定せられるであらう。また同じ水車でも水量の多い時と少い時とでは調子に差違が生ずるであらう。このやうに考へて見ると水車と云ふものも絕對理想的な仕事の能率を擧げ得る條件にあると云ふ場合はさう多くはないわけであるし、また水車に依つては水流との關係が始めから調子の惡いものと良いものとの別もあるであらう。

人間もまたその通りで、その人の生死兩本能の調和如何に依つて、その人の仕事の能率に非常に相違があるわけである。それは素質的な問題でもあるし、環境や時代の問題でもあるだらうし、又はその人の生涯の時期（年齡）の問題でもあるだらう。さう云ふ種々な條件に依つてその人の生死兩本能の調和はよくなつたり惡くなつたりする。それに依つてその人のエネルギー（仕事の能率）は區々に上下し動搖する。發展することもあるし、退化することもあるし、停頓することもある。

併し原則としては人間は生きてはゐるのだ。病氣だ、神經衰弱だと云ひつゝも、とにかく動いてゐるのだ。それは丁度、ガタピシ云ひながらともかく動いて調子惡く米を搗きつゝある水車のやうなものである。この調子の惡いのは何處に原因があるかを探索し治療するのが、醫者や分析者の仕事である。

水車の數多くの小桶の中に塞きとめられ汲ひ上げられた水流は水流としてその力をなほ多少保存しつゝ、而も同時にそれは既に水流ではなくなつてゐるのだ。物理學的に云へば、水の力は運動のエネルギーに變化しつゝあるのだ。水車の小桶の塞きとめる力に依つて靜止を餘儀なくせられたる水は今や完全に運動のエネルギーたる資格を喪失して位置のエネルギーに變化して了つてゐる。勿論、實際にはその水は直ちに落下して水流の中に再び合致して運動のエネルギーの中に

還元することはするが……。水車はまたその反對に、水流の運動から働きかけられさへしなければ、位置のエネルギーを保有し靜止してゐたのであるが、水流の力に働きかけられると、位置のエネルギーを漸次に放棄して運動のエネルギーを保有するやうになる。卽ち、水流も水車も共にその本性に反したものとなるのだ。その事に依つて却つてこゝに仕事の能力と云ふものが產み出されるのだ。

人間もまたそれと同じであつて、死の本能（卽ち生物として自己を破壞して無生物としての自己に還元せんとする安定への傾向）と生の本能（一旦與へられた生物としての存在をそのまゝ惰性的に、慣性的に持續せんとする傾向）とは本來相反矛盾したものであるが、それがいみじくも調和することに依つて、生死兩本能ともにその本性と反對なものとなつて、仕事の能力を發揮するやうになる。その仕事と云ふのは、私が豫々說くやうに三種あつて、性的には子供（次代者）肉體的には物資、精神的には文化を生み出すやうになるのである。これを私は產靈（むすび）の三態と名付けてよからうと思つてゐる。さうして、凡そ健全な人間は皆この三態の產靈を發揮するものであり、これの發揮の出來ないのは、或は不十分なのは、病的なのであり、病的なのはつまり生死兩本能の調和よろしきを得てゐないためであり、その調和をして再びよろしきを得しめるのが治療であり分析であり、神經戰はつまり人工的に、謀略的に、この調和を喪失せしめんとすることで

あると云ひ得るのである。

## 八、心理の健康と不健康

凡そ何でも事物は一應そのものとしての存在力を保有してはゐるが、外部から強い刺戟や打撃を加へると、そのものゝ存在保有力は崩壞して土に（大袈裟に云へば地球に）還元してしまふ。そのことは、見方を變へれば、一切の事物（人間もその内に含めて）は、常に地球に還元しようとの傾向（衝動、本能）を不斷に内に藏してゐるのだと云へるのである。これが分析學で云ふ死の本能であつて、佛家の云ふ如く、凡そ生あるもの必ず滅し、形あるものは遂に崩れるに定まつたものである。併しさう云つたからとて、生あり形あることが無意味と云ふわけではなく、その死滅はやがてまた再生への機緣となるのである。

このやうに一切の事物は死滅への傾向を有するものであるが、併し同じ死滅でも健康な死と不健康な死とがある。大往生もあるし、醉生夢死もある。崇高なる犧牲死もあるし、犬死もある。器物にも素燒のやうに脆いのもあるし、鐵器のやうに頑丈なのもある。

人間もまた同じであつて、外部からの些細な刺戟や暗示に依つて、直ぐに人間としての機能（精神神經作用）を喪失するものもあるし、外部からの刺戟や暗示に對して必ずしも鈍感ではな

いが、そのために自分の生命力を破綻せしめられるやうなことがないものもある。つまり、健康な人間と不健康な人間との別があることは當然である。ところで、品物が外部からの些細な刺戟や衝撃に依つて崩れ易いのは、その物に始めから疵が附いてゐるか、或はそのものを構成してゐる各分子間の相互求引力（物理學で云ふ分子力）が軟弱であるか、何れかのためである。人間もまたそれと同じであつて、外部からの何かの暗示や謀略に依つてその人の生活意志又は生存目的に動搖を來たす（戰時で云へば敗北主義的思想を起す）とすれば、それはその人の心理構成力が軟弱なためである。それ故に、或る國民の精神構成が極めて頑健に出來てをれば、神經戰的謀略と云ふものは、原則として、全然效果を擧げる餘地はないわけになつて來る。併し凡そ世の中に完全なものと云ふものはないやうに、地上には完全に健康な人間と云ふものはあり得ない。みな何らかの病的な點、又は事情によつて病的となり得べき傾向又は弱點を有してゐる者ばかりである。それは生物が元來、生死兩本能と云ふ抑々矛盾したものの妥協に依つて生成してゐる以上、當然である。

ところで、戰爭と云ふものは、異常に不安なる人工的環境である。丁度、地震や雷鳴が異常に不安な自然的環境であるのと對照をなして……。それ故に、大地震、大雷雨の中にあつて完全に平然としてゐる者がないやうに、大戰爭の最中にあつては、前線銃後の別なく、人々の神經狀態

は程度の差こそあれ、みな何らかの異常的、變態的傾向を示さないわけに行かないのである。そこに敵側の神經戰的謀略が效果を擧げ得べき可能性が生じ、その可能性を極度に利用しようと云ふのが米英の目標である。

それ故に、敵側の神經戰的謀略に對抗するためには、まづ（一）戰爭の條件を有利にすること、（二）萬一不利な條件下に立たされてもそれを打開する方法や希望を前線銃後に示唆すること、（三）敵の謀略の心理學的性格を分析的に理解してそれを打破すること、（四）我方の前線銃後の神經に對して心理學的の補强工作を講ずること、（五）逆に敵側の神經構成を打擊し得るやうな心理學方策を講ずること、などを實行しなければならない。

## 九、戰爭條件を有利に

前節未に神經戰に備ふるための對策五ケ條を擧げておいたから、こゝにその各々に就いて多少の說明を加へて見る。

一、第一條は、戰爭の條件を有利にすることであつた。神經戰と云ふものは、狹い意味に於いてはどうせ武力戰に對する補助的な役割を帶びたものである。廣い意味に於ける神經戰とは思想戰であるが、思想戰は旣に單なる神經戰ではなく、從つてこれは武力戰への補助的な役割のもの

ではなく、却つてこれへの指導的な役割のものであつて、武力戰が却つて思想戰への補助的役割のものであるべき所以は、私が前著『科學的皇道世界觀』の中で詳しく述べておいた通りである。狹い意味、即ち嚴密な意味に於ける神經戰とは、思想戰のやうな智能的なものではなく、本能的なものである。智能と本能との關係に就いては、私がこれまで種々の著書で屢々說いて來た通り、前者が後者から昇華したものである。本能が現實外界の刺戟に應じて質的變化を起して精神的なものに轉換して或は智能となり、或は情操となり、或は所謂意志となるのである。約言すれば、本能は無意識的なものであつて、智能は意識的なものである。

で、廣い意味に於いては、嚴密に云へば、精神戰があるのみであつて、その內、意識的方面の精神戰はこれを思想戰と稱し、無意識的な方面の精神戰を神經戰と名付けるのだと云つて大過ないであらう。さう云ふわけであるから、神經戰のない思想戰は考へられないのである。何となれば意識（思想）は抑々無意識（本能）から昇華し純化し變化したものに外ならぬからである。それ故に、神經戰への對策を考へずして思想戰に備へると云ふことは、たゞ言葉のみであつて無意味であるが、さりとて神經戰への對策のみあつて思想戰への備へのないと云ふことは畫龍點睛を缺くものである。何となれば、人間は、殊に文明人は、神經のみの存在ではなく、智能を始めとして、高等なる精神機能に依つて生きてゐる生物であるからである。

原始的な心理、即ち神經のみあつて、文化的に洗練せられたる心理、即ち智能のないもの、又は不十分なものが、如何に精神的に軟弱であり無力であるかは、原始人、野蠻人、子供等の心理生活が如何に無力であるか、病的であるかを見れば、思ひ半ばに過ぐるものがある。

さて、戰爭の條件を有利にしておく事が神經戰の對策第一の要件であるのは、常識的に考へても直ぐに判ることであるが、現に勝戰の場合には人々は何らの不安なく、神經を惱ますことなく、從つて敗北願望を起すことのないに徵して明かである。それは丁度、白晝明るい陽光の下にあつては、如何に幽靈の話を聞かされても誰も恐怖心を起したりしないのと同じである。咄し家でも怪談を試みる場合には、必ず灯を仄暗くし、聲を低くして語るに定まつてゐるのはそのためである。

戰爭の條件を有利にする方法に就いては私が云々すべき立場ではなく、それは專ら軍人や政治家の任務であるから、こゝには說かない。

## 十、希望を持たせる

第二は、萬一不利な條件下に立たされてもその惡條件を打開する方法や希望を前線及び銃後に示唆することであると、述べておいた。戰爭はどうせ一方的勝利に終始すると云ふことは殆どあ

り得ない。一進一退のものであり、相互に或る程度までは傷つけ傷つき合ふものであるから、神經的な不安は双方にあるに定まつてゐる。故に、神經戰の行はれ得る餘地は如何なる場合にも存するのは當然である。肉を切られても相手の骨を切れば、勝利は此方にあるわけである。で、肉を切られて直ぐに降參する事は、武力戰に敗れた如く見えて實は相手の神經戰に敗れたわけになるのである。

如何なる場合にも、局面打開の可能性は絶對にないと云ふことはないであらう。個人と個人との間の腕力的な喧嘩の場合には、腕力や體力と云ふ條件が單純で局限せられてゐるから、局面打開の方法が立ちにくゝ勝負が比較的に簡單につき易いが、國と國との戰爭、殊に現代戰のやうに總力戰の形態に於いては諸方面の勢力の融通が相互に有無相補ひ合つて、非常に强靱になつてゐると云ふことを考へねばならぬ。またそのやうな國内諸勢力間の相互融通を十分につけ得るやうな方策を講ずることが、とりもなほさず、「打開の方法や希望」をつけることであり、そのやうな方法や希望のつきつゝあると云ふことの承認が、前線及び銃後の神經を正常にする所以となるのである。現在のドイツの宣傳相の國民に向つて連りに說くところや、飛行機其他兵器生産工業の規模を圖入りで提示することなどが、實にその効果を目指しての努力であることは人々の容易に認知し得るところであらう。

東郷元帥は「戰場に慣れぬ者は味方の損害が過大に見え、士氣沮喪するものである、戰局はやゝ不利と見える時は五分々々、五分々々と見ゆる時はすでに勝利である」と敎訓してゐるが、そのやうにとかく人間は重大事に際して物事を悲觀的に考へ易いものである。何故にそのやうに悲觀的に考へるやうになり易いかの心理學的理由に就いて第四條を説明する機會に説くとして、こゝではたゞ、そのやうにとかく悲觀的に物事を考へ易い人間心理の自然性を理解してこれを撥無し治癒する方策を立つるに遺漏なきやうにせねばならぬと云ふだけに止めておかう。

## 十一、敵の謀略の心理學的性格の觀破

第三條は、敵の謀略の心理學的性格を觀破して、その神經戰的効果を打破することであつた。敵米英謀略の心理學的性格を一言にして盡すことは困難であるが、その性格の第一の特徴は甚だしく威嚇的であると云ふことだと云へると思ふ。これは米英のみならず、歐洲諸國共通の特徴であると云ふことも出來るやうに思へる。これは彼等の思想が一般に唯物論的であつて、精神的傾向に乏しいと云ふことゝ密接な關係のある事實である。精神的でなく唯物的であるから、相手國の精神に訴へて思想戰を張ることが不可能である。思想戰に於いては包容的、容認的で、つまりまつろはしめ信服せしめることが出來るが、否、それこそ思想戰術のアルフアにしてオメガであ

るが、もしこの方面の手が封ぜられてあるか、又は不得意であるとするならば、是非なく唯物論的な威嚇戰術に賴るより外に道はないのである。威嚇の正味は武力にあるが、武力は武器、彈藥、船舶、食糧など、悉く物資の力に賴るところ頗る大であることは固より當然である。從つて物的數量をなるべく大ならしめようとするやうになることも亦、從つて當然となる。然るに武器は消耗品であるし、武器を消耗する以上は、その武器を使用する人員も亦消耗しなければならない。然るに人員が消耗すると云ふことは唯物論的威嚇戰術の中に算入してないところであるし、よしんば算入しようとしても算入しきれるものではない。何となれば、兩者は始めから兩立せぬものであるからである。算入してあるのはたゞ、危くなれば降服すればよいと云ふことだけである。そこで威嚇戰術が破綻を來たすのである。現在の米國の焦燥的な戰鬪ぶりは、實にこの破綻への彌縫策であることは申すまでもない。

英米のみならず、歐洲の神經戰が殆ど專ら威嚇戰術に外ならぬと云ふことは、前にも既に述べたが、さてその威嚇はどう云ふ形でなされるかと云ふに、第一は右に述べたやうに、まづ數量の誇示である。武器生產の天文學的數量の誇大宣傳である。次には、大攻勢をとるぞ〳〵と云ふ豫告である。かう云ふ豫告は、日本やその他一般の東洋人は殆ど行はない。たゞ默々として實行あるのみである。時には桶狹間的又は眞珠灣的の奇襲戰術が用ゐられる。

都市に對する大規模な盲爆の如きも、一見武力戰の如く見えて實質的には威嚇戰術、又は神經戰術であると云ふことが出來る。何となれば、あれ等の盲爆の目的は相手國武力の破碎にあるのではなくして、武裝なき銃後一般民衆を殺すことに依つて、その神經組織を破壞することが窮極の目的たるに外ならぬからである。また、あのやうな非人道行爲は幾度反覆しても、相手國の武力を破碎しない以上、戰爭終結のためには間接行爲たるに外ならぬことは申すまでもないからである。

米英が一時連りに亂發した戰後經營論は我々から見れば、捕らぬ狸の皮算用に過ぎなくて、滑稽感を誘發するに止まるけれども、彼等としては、それで相手國の神經組織を攪亂するつもりであることはよく判るのである。その戰後經營論の中には、日本人を地上から抹殺するとか、總ての男子を去勢するとか、日本を世界の遊覽地にするとか、誠に以て非人道的な思想の數々を暴露してゐたが、彼等はそれに依つて日本人を威嚇してその神經組織を破碎するつもりであらうが、その効果は却つて逆で、愈々日本人をして戰意を固うせしめたのに終つたものであることは、英國のベルリン盲爆がドイツ人の戰意を一層昂揚したに止まつたのと同じである。即ち、我等はそのやうな神經戰的末節技法の中に彼等の思想戰上の敗北感を觀破するだけの剛健な神經を保有してゐなければならぬと警告するものである。

彼等が思想戰上の敗北感を思はずも暴露した今一つの事實は、我等が東亞諸民族の獨立と解放とのために努力するに從つて、彼等がとつた種々の滑稽な態度である。卽ち、例へば、フィリッピンの獨立に對して、米國からもフィリッピンの獨立承認の時期を早めるなどゝ聲明したことの如きである。流石に米國人の間にもこのやうな聲明の滑稽であることに氣付いたものもゐて、さう云ふ聲明はやはり米國がフィリピンを奪還して後に發すべきものであらうと注告したことであつた。併しそんなことは人に注意せられるまでもなく、大統領自身に判つてゐなくてはならぬ筈であるが、それが判らぬ程の低能か非常識かであるならばともかく、一人前の智能を具へてゐる筈の大統領がその一人前の智能を一時的に喪失したのは何に依るのであらうか。それは彼の思想感情の混亂を意味し、その混亂は思想戰上の敗北感から生じ來たつた狼狽のために外ならぬと思はれる。

このやうに敵にも十分な弱點があつて、その弱點を埋め被ふために、自分の長所を誇張的に發揮しようとしてゐるのが、米國の現在の無理押しな戰鬪方法となつてゐるのだと云ふことを洞察せねばならぬ。さうしてそれがまた彼等得意の威嚇法にもなつてゐるのだと云ふことにも氣付かねばならぬ。

威嚇と云ふものは、前にも述べた通り、精神的な自信のないものゝすることであつて、その効

果は恐怖、反撥、怨恨に存し、成功した場合にもせい〴〵屈從であつて、心服、信頼、畏敬ではない。心服、信頼、畏敬の效果を期し得ざる勝利は眞の勝利ではなく、永久に安心の出來ない壓伏に過ぎない。我等はそれに反し、眞の勝利を目指すものであることを忘れないやうに努めねばならぬ。

## 十二、味方の心理への補强工作

第四の對策は、我方の前線銃後の神經に對して心理學的の補强工作を講ずることであつた。補强工作を講ずると云ふ以上は、人々の神經は始めから或る程度の强靱さを具へてはゐるが、併しその强靱さは絕對的なものではなくて相對的のものであるから、條件の變動に應じてまた弱化する可能性があると云ふことをも同時に承認してゐるわけになる。

そこで、人々の神經生活の强靱さ、及び軟弱化の可能性などに就いて、心理學的に明確な觀念を持つてゐることが、まづ必要であり、次にその明確な觀念に基いて、これを强化すべき方策の樹立が可能となるわけである。

さきにも述べた通り、絕對的に强靱な神經を所有してゐる人と云ふものはない。如何に健全な神經の持主でも、條件が極度に惡ければ誰でも神經異常に陷つて來るのは當然である。或る人が

一日朝、友人に會つたら、その友は「君は顔色が惡いがどうしたか」と訊いた。第二の友に會つたら、その友もまた「どうも貴君は近頃元氣がないやうだな」と云つた。第三の知人もまた「近頃健康の方は別狀はないのか」と尋ねた。このやうにして本人は家に歸つて寢込んでしまつたが、それは彼の三人の友がしめし合はせての惡戲であつたと云ふやうな話を或る心理學書で讀んだことがあるが、このやうな他愛もないやうな暗示に依つてさへ人々の神經は容易に破綻せしめられる傾向を有するのである。

このやうに、破綻への傾向は顯著ではあるが、併し他方に、調整への傾向もまた顯著であつて、條件が改まれば容易にケロリとよくなつてゐる場合はまた多いのである。何故にこのやうに破綻し易かつたり調整し易かつたりするかと云ふに、それは私の考へでは、人間の生命力と云ふものが抑々相互に矛盾したものゝ微妙な調和に依つて構成せられてゐるからである。相互に矛盾したものとは何か。それは保存の本能と破壞の本能とである。保存の本能とは、種族保存の本能、個體保存の本能などゝ生物學の方で呼んでゐる本能のことであつて、この方の本能は生物學でも常識でも氣付いたが、破壞の本能の方は氣付かなかつた。これに氣付いたものは恐らくは精神分析學であらう。破壞の本能とは、生物としての個體がその有機物としての存在を無意識的に不安定なりとして元の無機物狀態に還元せむとする傾向である。併しそれは自己保存の本能と矛盾す

るが故に、この矛盾を解決するために次代者を作り出して、安んじて全面的に自己破壊の大涅槃境地に歸らうとするのが破壞の本能に外ならない。それ故に生命とは相矛盾する二つの傾向（本能）が巧妙なる相互の妥協を得て、その何れもがその本來の性質を失ひ、第三の狀態となつて、その狀態の下にあつて矛盾の解決を次代者生產と云ふ形の下に行ひ、かくてこの解決がつくと共に、兩本能は各々その本來の性格を露出して、保存と破壞との兩方に別れて行くのである。

それ故に、外部からの刺戟や壓迫が內部の生命の抵抗力に堪え得る範圍內のものである限りは、兩本能調和は破綻せぬのであるが、その抵抗力以上の力を以て外部から壓迫せられる場合にはこの調和は當然破れざるを得ぬのである。かくて神經症的不安狀態は擡頭し來るのである。所謂神經戰はこの効果を目ざしてゐるものである。

有體に云へば、人生は常に種々な不安に滿ちてゐる。併しそれ等の不安は神經强健なものにとつては平然堪え得べき程度又は性質の不安であるが、併し神經强健ならぬものにとつては到底堪えられぬ不安に充ち滿ちてゐる。人間が恐い、異性が恐い、群衆が恐い、偉人が恐い、動物が恐い、その他さまざまの恐怖の對象が至るところに發見せられるのが神經異常者の生活である。併し考へて見れば、それ等の所謂病的恐怖には一應の道理が含まれてゐるのであつて、犬を恐ろしがるのは馬鹿々々しいと云ふが、その犬は狂犬であるかも知れぬではないか。偉人が恐くないと

云ふが、凡庸な人間として偉人の前に出て恥ぢぬと云ふは、あまりに厚顔無恥ではないか。さう云はれると一々尤である。併し健康者はさう云はれても、理窟は一應尤であつても、實感には遠いのである。併し遠いと云つたとて、嚴密に云へば、やはり一種の「幸福なる鈍感」には相違ないのである。

理窟はどちらにもつく。理窟だけでは解決はつかない。この區別を生ずるもの、卽ち神經の健不健を定めるものは何であるか。それは、私の學問的な答辯を以てすれば、相矛盾する兩本能の調和がよろしきを得てゐるか否かに依つて決するに過ぎないのである。

それ故にまた、敵側からの種々な謀略宣傳に依つて容易に神經生活の破綻を生ずる者は、その人の兩本能の調和よろしきを得てゐないのだと云ふことが許されるのである。神經生活の破綻とは何であるか。それは敗北願望の事である。敗北願望とは國民としての死を選ぶことである。更らに精しく云へば、國民としての死を選ぶことに依つて個人としての生を拾はうとするものである。それ故に、個人として神經強健な者は國民としてもまた容易に屈しない神經を有するものであるとの結論を大體に於いて下して差支へないと思ふのである。從つてまた、個人の神經の強健化を圖り得る精神分析學に依つて、國民として神經戰に堪え得る人々を多く作り得ると云へると思ふのである。

## 十三、神經よりも良心に訴へる

第五の方策は、逆に敵側の神經構成を打破し得るやうな心理學的な工夫を凝らすことであると云つた。併しこの言葉は、實は多少の修正を要するのだ、「敵側の神經構成を打破する」と云ふのが問題の辭句である。前にも述べた通り、敵側は神經戰と云ふ言葉を用ふるが、さうして確に神經戰術を弄するが我等は皇國の民として、皇道の使徒として、神經戰のやうな末節細技に拘泥したくはないのである。まして鬼面人を威かすやうな兒戲に類することを行ふべく、我等はあまりに誇高いものでなければならないのだ。我等は飽迄も思想戰を戰ふものであつて、卑劣なる神經戰など戰ふを潔しとしないのである。

神經戰はこれに依つて勝利を收め得たとしても、敗者は相手に心服はしないものである。從つて非常に不快な感情をいつまでも殘すものであるが、思想戰はこれに依つて敗れたものは相手に心服するのである。さうして敗者は敗北後にも相手を敵ながらも天晴れと云ふ氣持になつて愉快なのである。このやうな勝利にして始めて眞に勝利の名に價するものであることは、私が前著『勝利者の道德』の中で詳述しておいた通りである。

「第一の道德は敗者——と云ふ言葉が穩當でないと云ふならば、被庇護者と換言してもよい

――から單に恐怖せられ、壓迫を感ぜられるだけではいけない。畏怖を、或は畏敬を感ぜしめるのはまだよい。なほ尊敬と信賴と親愛と、更に慾を云ふならば、信仰を得なければならないと云ふのである。そのためにはまづ、自分が自分自身を尊敬することを得なければならない。併し人間として自分で自分を尊敬すると云ふことの如何に難事である事か。固より自分で自分を自惚れるのは容易である。併し自惚は幼兒性を帶びたものであるから、そのやうな自惚家の行動は現實生活に適合せず、必然的に敗者の位置に轉落するであらう。

最も具體的な、根本的な場合で說明するならば、よき父親が彼自身の家庭に於いて占めてゐる如き位直を勝利者は被庇護者から保證せられるやうでなければならぬのである。よき家庭に於ける父親への妻子からの尊敬と信賴とは誠に美しいものであるが、併し實際に於いてそのやうに美しい家庭はさうざらにあるものではなく、不幸にして私は精神分析治療家として、そのやうな不幸な家庭又はそのやうな不幸な家庭から生み出された不幸な病者のあまりに多くを扱つて來てゐるので、愈々そのやうな勝利者の位置確保の如何に難事であるかを知り過ぎてゐるのである、まして異民族間に立つて勝利者としての位置を永く確保するには、容易ならぬ覺悟と努力とを要することを考へねばならぬ。彼等被庇護者たちは、宛も妻子がその家長を信賴したがるやうに、その勝利者を尊敬したがつてゐるものであり、その要求の如何に熾烈であり、その要求の裏切られ

た時の反動と失望とが如何に深刻であるかと云ふことも、深く覺悟しておかなければならぬのである。

第二の道德は、勝利者が自分の位置に慢心することなく、常に競爭者を身邊に豫想しつゝ奮鬪努力しなければならぬと云ふことであつた。そのためには、併し、我等の周邊には相當に有力な敵性諸國がなほ健在であることにむしろ感謝せねばならぬ。併し、それ等の敵性諸國の健在に拘らず、なほ時々自惚の煙幕を引き廻して、それ等の敵の存在を無視しないまでも輕視するかのやうな言論行動の時に見える事は、御互に大いに謹まねばならぬ。我が國は神國であることには間違ひはないが、併し神國であると云ふ信念の陰に寢そべつて晝寢ばかりしてゐては大變なことになる。たとへ神國の民と雖も人間には相違ないのだから、あらゆる意味で萬能とは行かないから他國他民族の長所と優性とはこれを卒直に承認し、學ぶべきは學び、拒くべきは拒けねばならぬ。」

以上長々と自分の舊著（昭和十七年十月出版）から引用したが、これは今日に於いて再讀して貰ふことに特別の意義を認めないわけに行かないからである。その理由は一々說き立てるまでもなからう。

このやうに神經戰は巧妙適切になされる限りは相手國民の本能感情に衝擊を與へて不安神經症

狀態に陥れることに依り敗北願望を起させることを目標とするものであるに對し、思想戰はそれをなすものにその資格のある限りは、敵國民の良心に訴へて我方を尊敬せしめ、遂に鬪爭意志を放棄せしめることを目的とするものである、共に極めて心理科學的な方法である點に於いて變りはないが、米英並びに西歐の諸國が專ら神經戰術の方を選び、我國が殆ど思想戰的方法に據つてゐることは、東亞諸國の國柄、國民性及び文明の相違に基くとは云へ、頗る興味あることでなければならない。

威嚇的な神經戰術が効果的になされたる場合には確に相手國民を不安神經症的狀態に陥れ得べきは事實であるが、それに對する防備をなすためには、まづその心理的機制に就いての研究から始めなければならない。不安神經症それ自身は神經病者の特別の症狀であるが、正常人と神經症者との間には、科學的に云つて必ずしも本質的差別はないのであるから、健康者も亦やはり特殊の場合に處して自己の正常さを失はないためには、平素から心理科學的の用意を怠つてはならないのである。不安神經症と神經戰との關係に就いては、別著に於いて詳述しておいた。

思想戰は專ら相手國民の良心に愬へるものであるとさきに述べたが、併し米英に果して良心があるかと、或る種の人々は憤然として反駁し來るであらう。現代の米英人がその良心に於いて極めて低調であることは事實である。その病院船襲撃や文化財の爆破などを見て思ひ半ばに過ぐる

ものがある。併し人間として全然良心のない存在と云ふものは考へられない。それは私が心理科學徒として責任を以て保證し得るところである。我等は思想戰の背景たる行動とを今後益々十分に謹み、確信を以てこの方面に滿身の努力を拂つて行かなければならない。一時は敵はそれに對して風馬牛のやうに見えても、いつかはそれに屈し來るであらう。何となれば、良心の權威は人間の精神機能に於いて絶對的のものであるが故に、良心の命令の下に於いては名分なき戰ひは遂に放棄せらるゝに至るべきは火を見るよりも明かであるからである。

ドイツがソヴィエト・ロシアとの戰爭を以て、歐洲の文明をボルシェビキの脅威から守護するためであると稱してゐるのは確に神經戰術ではなく思想戰術に屬するものであるが、これが米英に對してどれだけの效果があるか、米英がこの言葉を果して額面通りに買ふか、どの程度まで割引して買ふかは興味ある問題であつて、少くともフィリッピンの獨立がルースヴェルトに與へた程の衝撃を與へなかつたことだけは確かであらう。フィリッピンやビルマの獨立が米英に與へた衝撃の大きかつたのは、それが單なる思想戰術でなく、思想の實行であつたと云ふ點になければならない。それ故に、思想戰は必然的に實行に裏附けられなければ、眞に思想戰の名に値するものでないことが知られるのである。

# 第二章　ユダヤ恐怖と神經戰

## 一、ユダヤ排斥論の三大危險

現今わが國の言論界で最も流行を極めてゐる題目の一つは、ユダヤ排斥と云ふことである。わが國體を護持するためにこれは必要だとする主張には一應筋が通つてゐるやうに見えるが、それに就いて自戒すべき三つの重大な危險が含まれてゐると云ふことを、こゝに明かにしておく必要を感ずる。

第一は、如何に現下政策上の必要や誘惑がありとは云へ、ユダヤ排斥上の先輩國の思想や主義とわが皇道精神とを混同して了ふ結果にならぬやうにしておきたいと云ふことである。とかく西洋思想と云ふものは排他主義的精神に於いてはユダヤ主義や米英思想や共產主義とも多くの共通點を有すると云ふ點に十分に氣付いてゐなければならない。

第二は、ユダヤ的排他主義に對するに此方からも排他主義を以てすることは、結局敵と對等の立場に立つことで、これでは聖戰の目的を晦澁にするのみならず、相手の立場をも相手自身から

見て聖戰と認めてやる結果になつて了ふと云ふ點。「大東亞宣言」に於いても、排他主義と云ふことは少しも謳つてない。「大東亞各國は萬邦との交誼を篤くし、人種的差別を撤廢し、普く文化を交流し」と云つてゐるところには、何ら歐米的排他主義の匂ひはない。これでなくてはならないのである。

以上二項に就いては、私は前著『科學的皇道世界觀』の中でも別の言葉で評說しておいたから、こゝには繰返さない。

## 二、ユダヤ勢力神祕化の一例

第三はユダヤ人の力をあまりに神祕的に偉大視して畏怖することは、結局、ユダヤ恐怖症の毒菌をわが國民思想の間に流布することになり、從つてユダヤのため神經戰の先棒をかつぐことになりはせぬかと云ふ點である。ユダヤ恐怖に就いては、例へばN某氏は十九年二月號の『×××』誌上で、次のやうに說いてゐる。

「ユダヤ人は人類の弱點たる利己主義精神に投じて、個人主義、自由主義を煽動し、民主主義、國際主義を宣傳した。かゝる煽動と宣傳に乘ぜられて、フランス革命、イギリス革命、アメリカ獨立戰爭等、一聯の近代民主主義革命は續發し、フランスのブルボン王朝は倒れ、イギリスの國

王はその權力を奪はれ、アメリカは共和國となり、最後までユダヤ革命に抵抗したロシアのロマノフ王朝、オーストリアのハプスブルグ王朝及びドイツのホーヘンツォレルン王朝も、第一次ヨーロッパ戰の過程に於いて抹殺された。かくてユダヤ人の非望は、この時、九分通りまで達成せられたのである。」と。

一體、祖國もなく、從つて軍事力も政治力もなく、持つてゐるのはたゞ金融經濟力と學力とだけに過ぎないユダヤ人がたゞ「煽動と宣傳」とだけで、このやうな風に人類の歷史を創造し變革したとすれば、實に驚くべき奇蹟ではないだらうか。現實社會や自然の法則を超越した魔力的な事實であることになりはせぬか。抑々、何故にユダヤ人の力をこれほどまでに神祕的に讃仰し畏怖しなければならぬのであるか、私には全然理解が行かないのである。

ユダヤ人等がこれほどの奇蹟的偉業を演じ得た動機は「人類の弱點たる利己主義精神に投じて……煽動と宣傳」とを用ゐたことにあるとの見解に基いてゐるのであるが、利己主義精神が人類の弱點か强點かそんな詮鑿は只今は姑く預つておくとして、人類の弱點たる利己主義根性は我等の隣人たちにもみな共通的に存在してゐるが、今、我等が假りにその隣人の利己主義精神を煽動したり利用したりして、彼等を破滅に導かうとしないまでも、何か自分の思ふ壺にはめ込まうと思つて、策謀したとする。彼等は果してそんなに易々と我々の手に乘つて來るであらうか。彼等

は直ぐに我等の計畫や意圖を觀破して、我等には誠意がないとか、策動的であるとか、陰險であるとか、口先ばかりうま過ぎるとかいつて、我等に反抗し、批難し、敬遠し、排斥し來るやうになるのは明かである。我等が一隣人に就いてさへ不可能なことを、ユダヤ人は一國一民族の、否世界歴史の發展過程に亙つてなし得たとすれば、實に驚くべき神祕的な魔方を具へた民族であると云はねばならぬことになる。

一體、近代歐洲の諸々の革命や、諸々の王朝の滅亡と云ふ歴史的事實は、ユダヤ人の陰謀としてのみ理解するのが最も合理的なのであらうか。もし最も合理的だと云ふならば、希くはその理由を明示して貰ひたい。その理由を明示することなしにたゞ結論だけをいきなり押しつけられることは、我等の科學心には甚だ不滿であり迷惑である。それ等諸々の歴史的事件は社會學的に、生物學的に、經濟學的に、心理學的に、卽ちもつと科學的に、合理的に説明出來ないのであらうか。どうしてもユダヤ人の魔力に歸さなければならないのだらうか。どうしてもユダヤ人の魔力の故だと云ふならば、それも仕方がないから、何故にユダヤ人等はそのやうに他の民族の持たない不思議な力を持つやうになつたのか、その魔力發生の契機と、その魔力實施の過程とを、せめてもつと科學的に説明して貰ひたいのである。

## 三、ユダヤ的魔力迷信の輸入

元來、ユダヤ人の力を神祕的に、魔力的に考へることは西洋に於ける一種の傳統的な迷信であるやうに思はれるのだが、さう云ふ迷信を無條件的に、模倣的にわが國に輸入して來る人々が近頃の自稱愛國者の間に多いのではなからうか。これも意識せざる一種の西洋盲拜病に外ならぬのではなからうか。私はいつか、『プラーグの大學生』と題する映畫を見たことがある。これはドイツの詩人エーヴェルスの同名の小說を映畫化したもので、その中でユダヤ人らしい悪魔的な金貸しが或る青年(大學生)と貴婦人との運命をあやつつて邂逅させ、遂に二人ともを破滅に陷れる筋を象徵する一場面があつた。それはその金貸しがとある岡の上に立ち、怪しげな古洋傘を右に左にあやつると、青年と貴婦人とは全然方角を異にする地點から寄り集つて來て邂逅すると云ふ場面であつた。丁度、我等が少年時代に祖母等から聞かされた狐の話のやうに、狐はその太い尾を右に左に打ちふると、狐に憑かれてゐる旅人は右に行たつり左に行つたりすると云ふ話と誠によく似てゐる。さう云ふ狐の尾の迷信は、今日ではも早何人も信じてゐるものはない如く、ユダヤ人の古洋傘に人の運命を左右する魔力がひそんでゐると眞面目に信じてゐる者も恐らく一人もなからう。併し狐の尾や古洋傘の魔力は信じなくとも、ユダヤ人の「煽動と宣傳」の抽象的魔力

だけは盲信してゐる人々が世界中に相當に行き亙つてゐるのみならず、どうやらわが國の言論人の間にさへその病氣の蔓延しつゝあるらしく思はれることは洵に驚くべき奇蹟の一つであるが、この奇蹟もやはりユダヤの古洋傘の先から出て來たことなのであらうか。

とは云へ、私はユダヤ人が何ら警戒を要しない、無難な人間であると云はうとしてゐるのではない。相當に油斷のならぬものだらうと思つてゐる。併し私はユダヤ問題にそれほどの興味を持たぬので、自分であまり積極的に研究して見ようと云ふ氣にならぬだけのことである。で、その方面の專門家の言說をなるべく信用しようとするのであるが、併しその方の熱心家の一人として有名な四王天氏が最近の議會での質問と見ると、「フリーメーソンが相當に活躍してゐるやうであるが如何?」と云ふ言葉があつた。勿論その「活躍」の實際は說明せられなかつた。それに對して內務大臣は不得要領な答辯をしてゐた。答辯も不得要領になる筈だと思ふ。その方面の特別熱心な專門研究家でさへ「……してゐるやうであるが」と云ふやうな曖昧な言葉でしか云へないことを、いくら內務大臣だとて判然と答辯出來るわけがないではないか。

## 四、敵はユダヤか米英か

私はユダヤ人がアメリカやイギリスの經濟界に相當の勢力を持つてゐると云ふことは、これを

認めるに吝ではない。現在の米國藏相モルゲンソーはユダヤ人であり、大統領ルーズヴェルトも彼の御機嫌を損じないやうにしてゐると云ふやうな話も屢々聞及ぶ。併しそれ故にとて、アングロサクソンのみならずイタリー人やドイツ人も相當多數に入込んでゐる米國內に於いてさへ、總てがユダヤ人の勢力に依つて支配せられ、あやつられてゐるのだと考へることは、ユダヤ勢力を過大視し、アングロサクソンその他の諸勢力を過小視するわけになり、あまりに歪められた物の見方のやうに私には考へられるのだ。歪められてゐるだけならまだしもだが、そのために、我等は敵の正體が二重に見えて、彼等を敵として睨むわが眼が亂視にされることを恐れるのだ。我等は一體、米英と戰つてゐるのか、ユダヤと戰つてゐるのか、正體の判然せぬユダヤと戰つてゐると考へるより、正體の判然としてゐる米英と戰つてゐるのだと考へる方が、わが戰意は一層判然として來るのではなからうか。

このやうにわが戰意を亂視にしてまでも歪められた物の見方をしなければならないと云ふその心理に、私は心理學者として特別の興味を持ち始めた。その心理は恐らくは、敵米英の主體たるアングロサクソンがやはりユダヤ人のために支配せられてゐるのだと考へる事に依つて、我等のアングロザクソンに對する憎惡や畏怖がやゝ輕くなると云ふ無意識的な利益があるためでなからうか。その證據の一つは、米英の脅威が今日ほどでなかつた緒戰當時には、ユダヤ排斥が今日ほ

ど流行しなかつたことに見られる。併し、もし果してさう云ふ無意識心理的利益があつたとしても、それは純粋に心理經濟的過程に過ぎないのであつて、實際問題として敵米英の實力には何の變化もないのである。これはやはり、ユダヤそのものゝ力、又はユダヤに支配せられてゐる米英の力と考へるよりは、ユダヤを併呑してゐる米英の力と考へる方が合理的なのではなからうか。

ユダヤが米英を操つてゐるのだと考へることは、米英の力を過小評價するのみならず、ユダヤ勢力を過大視し、而もその力は世界變革の、造物主の神力に次ぐほどの偉大なものだと考へることに依り、敵のために神經戰のお先棒を舁ぐことになり、つまり利敵行爲であり、結局、敗北思想に辿りつく途上に立つてゐることに氣付かねばならぬ。

## 五、國體への脆弱なる信念

このやうな敗北思想を裏付けるものとして、論者に於いてわが國體に對する確乎たる信念の缺如してゐるのでないかを察せしめるものゝあることを、次に指摘しておかねばならぬ。少くともわが國體と西洋の王朝時代の國體とを同一視しようとする傾きのあることを指摘しておかねばならぬ。

さきに引用した文中にもあつたやうに、論者は「一聯の近代民主主義革命」や諸々の王朝の

「抹殺」は悉くユダヤ人の陰謀の結果だと考へるのであるが、私はユダヤ人の陰謀も或は多少そこに混入した形跡位はあるかも知れぬが、さう云ふ歴史的大事件は生物學的、經濟學的、心理學的法則の下に實現せられたのであつて、一二人間の小細工くらゐで何ともなるものでないと信ずる。もしユダヤ人の意志が多少そこに働いたかも知れぬとしても、それはユダヤ人以外の民族の意志の參與と兄たり難く弟たり難い程度のもので、つまり多少その動きに便乘したかも知れぬ程度の事に相違ないと考へるのである。主流をなすものはもつと底の方に力强く働いてゐる世界史的な盲目の意志力であらう。併しさう云ふ風に考へることは、論者に恐らく或る種の苦痛があつたに相違ない。西洋のあらゆる王朝の滅落はその風潮を東洋の方にも波及せしめる可能性を豫想させるからである。併しもし論者に於いてそのやうに考へてゐるとすれば、それは論者の頭が全然西洋風に歪められて出來上つてゐることを意味してゐるに過ぎないのであらう。西洋の諸王朝が、よしんば如何に次から次へと滅落して行つたとしても、日本の我等が一々それに神經を尖らせるには及ばないことではないか、それは丁度、支那の漢、明、清などの諸王朝が次から次へと興亡して行つた歴史が我等に一向無關係なのと同じでないか。抑々、成立の機制と本質とを異にしてゐるのであるから……。序に訊くが、支那の諸王朝の滅亡もやはり、ユダヤの「煽動と宣傳」の故だと云ふのか。西洋や支那の諸王朝は悉く純然たる支配者、征服者、搾取者であり、民衆

生活とは遊離してゐる貴族であるが、わが國體はその成立の契機と實質とを西洋及び支那のそれ等と全然異にしてゐるからである。それ等について十分な自覺と信念とのないものが、外國諸王朝の滅亡過程について神經を惱まし、またその過程がわが國に直接間接關係や餘波を及ぼすやうに恐怖したりするのである。かくてユダヤ人に見當違ひの恐怖を感じたりするのである。

結局、ユダヤ排斥者たちは恐怖症者であり、ユダヤ盲拜者病者であり、ユダヤのために神經戰のお先棒を舁ぐ利敵行爲者であり、わが戰爭目的を亂視的に錯綜させるものであり、西洋的傳統迷信の直譯的輸入者であり、その上わが國體に對する信念の脆弱なる者であると云ふことになつたが、希くはこの結論を科學的に覆して見せて頂きたいものである。

昭和十八年十月廿二日に言論報國會の講演會があつて、德富蘇峰、本多熊太郎、山田孝雄諸氏の時局講演があつた。その時、德富氏はユダヤ禍及びユダヤの宣傳上手について論及し、ひよつとすると、自分がかうしてこの壇上で叫んでゐる事も或はユダヤの宣傳の手に載せられてゐるのかも知れないと云ふ一風變つたことを云はれた。氏がどう云ふ心算でそんなことを云はれたか、私にはその時よく判らなかつたし、またその後になつて見つてもよく判らない。併しユダヤ恐怖をあまりに強く叫ぶことは、結局、敵の強力を宣傳してやることを意味し、それは敵のために神經戰のお先棒を舁ぐことになるのだと云ふことを、流石に氏の鋭い神經で感知せられた爲めではなかつたであらうか。私は只今別に結論を與へようとは思はな

いが、興味ある事實だから念のためにこゝに記錄しておく。

## 六、ユダヤ排斥論據批判

私は以上のところまで書き終つた時、その稿を揭げて、問題のN氏の論文が揭げられた雜誌の發行所たる某會事務所に出かけて行つて、幸そこに居合せたN氏に會つて、これが一讀を乞うた。その時、N氏は辯明的にユダヤ論を一くさり述べられたが、その論の內容は何れもあり來たりのユダヤ排斥論者たちの口吻から一步も出たものではなかつた。卽ち、

（一）ユダヤは『舊約聖書』に見られるやうに憎惡と復讐の化身であること。

（二）厄介千萬な選民思想を抱き、他民族を蔑視すること。

（三）直接生產の業に携ることを嫌ひ、とかく遊藝や商賣や賣淫など（學問の方はその時言及せられなかつた）に關係しようとすること。

（四）他民族滅亡のためには大金を投資するが、自民族のためにでも救濟事業などにはなかなか金を出さうとせぬこと。

（五）生產者東洋民族の上にダニのやうに襲ふて來て金融資本の管でそこから吸血すること。

などであつた。以上は私が前著『科學的皇道世界觀』の中で多少論及した部分もあるので、重

複することは避けたいが、簡單に批評して見るならば――

（一）ユダヤ人が憎惡的、復讐的であることは『舊約』に見えてをり、それをわが『古事記』と比較して、日本の神が如何に明朗寛大であるかと云ふことは、私も前著『世界人と日本人』の中で論じておいたことがあつた。併し人間の性質と云ふものは、まして、民族の性質と云ふものは素質や遺傳ばかりで說明され得べきものではなく、それ等と環境（後天的影響、歷史的地位）との相關關係に依つて決定せられるものであることは、私の心理科學の結論である。ユダヤ人は土地を失ひ、歐洲各地で繼子扱ひにされ、虐待と迫害の數々の歷史を經て來てゐるので、あのやうにひねくれた性格の者となつたのであつて、それには一體に憎惡的、復讐的であるところの歐洲の他の諸民族の性格と環境と歷史とをも考慮の內に入れてかゝらなければ、正確な科學的判斷であるとは云へないであらう。ユダヤ人だけが惡くて、他の歐洲諸民族はみな善良、寬容、溫和であると思ふのは、人の宣傳を鵜呑みにするあまりに東洋人らしい人のよさの表はれに外ならぬ考へだと思ふのである。

（二）厄介千萬な選民思想と云ふが、これとてやはり他のあらゆる民族が程度の差こそあれ頒前してゐるところであつて、あまりにユダヤ的な選民思想を共通にしてゐるものほどユダヤの選民思想を鼻持ならぬかの如くに排斥するのだと云つて過言ではないのである。支那民族も自分を

中心に考へ、四圍の諸民族を東夷、南蠻、北狄、西戎と呼んでゐたのであるから、その選民思想は相當なものであると云つて過言ではない。西洋人全體が東洋人全體に對して選民思想を以て臨んで來てゐるのに、その中のユダヤのそれのみを問題にするのは、蚤の小便にのみ神經を使つて猫の小便には無神經な猫好き婆さんのやうな病的心理に墮するものではないか。

(三) 農業のやうな直接生産事業に携はることを好まぬと云ふが、それはさう云ふことを云ふ人々が果して現在、農業に携つてゐるかどうか、何故に自分は農業以外の事に携つてゐるやうになつたかを反省して見ることに依つて、自ら解決のつく問題であらう。

(四) 滿洲國の某地區にユダヤ人村を作つてそこにアメリカ・ユダヤの資本を招き入れようとしたが、彼等は一文も出さなかつたと云ふことで、そのためにその企業者は失敗したと云ふN氏の話である。併し日露戰爭に際して、日本がロシアを征伐するとなると、大枚な金を貸してくれたと云ふのである。そこで、ユダヤ人は他國破滅のためには金は出すが、生産事業のためには、よしんばそれが自民族救濟のためになる場合にでも、投資しようとせぬ破壞好きの民族であると云ふ結論が下されるのであるが、この結論が如何に僻み根性的な、泣き言的な結論であるかは、心理洞察眼の特別に鋭い人でなくても判ることであらう。却つて逆に、彼等ユダヤ民族は、人々が錯覺してゐるほどに民族として全體的に團結してゐるのではなく、金持は金持で固まり貧民は

貧民で放置せられてあると云ふことを暴露するものではないか。ユダヤの貧民を救濟してやれば同族の金持 感激して投資すると考へた人々は、あまりにお人がよすぎたのみならず、彼等を一民族として强固に團結してゐると買被つてゐたことを自覺し、大いにそのユダヤ觀を改變せねばならぬ立場にあるのである。

（五）生産者東洋を搾取すると云ふ問題に就いては、それはユダヤ人のみでなく、歐米の一切の民族がその傾向を共通にするものではないかと、私が云つたところ、N氏はそれを肯定し、殊にユダヤ人がそれを顯著に有するが故に、ユダヤを代表的に排擊せねばならぬのだと云つた。

併しユダヤを以て西洋的搾取主義、侵略主義の代表としてこれを排擊するのだとすれば、これは結局、西洋文明及び民族への全面的排擊をカムフラーヂしたものに外ならぬわけになる。換言すれば、ユダヤ排擊とは西洋排擊への象徴的表現であると云ふことになる。果してさうだとすれば、こゝに二つの問題が起きて來る。第一、西洋文明の排擊は如何にして可能であるか、また如何なる意味又は程度に於いてなさるべきか。第二、何故に單なる精神的代表者ユダヤを强調し、軍事力や政治力を豐富に具へてゐる他の者等への排擊を判然强調するのを廻避しなければならぬのかと云ふこと。以上二つの問題に就いて多少詳しく考究して見る。

第一、西洋文化は果して排擊し得べきか。もし排擊し得べしとすれば、どの程度までそれは可

能であるか。西洋文明は搾取主義的、侵略主義的なものに終始してその他の要素が全然ないものであるか。さう云ふことも問題となり得る。西洋では文化のことをクルツール（獨）又はカルチュア（英）と云ひ、共に農耕と云ふ意味から出てゐることは人々の知る通りであつて、文明のことをチヴィリザチオン（獨）又はシヴィリゼイション（英）と呼び、それは都會化の意であることは、これまた人々のよく知る通りである。西洋には消費主義的な文明のみあつて生產主義的な文化はないと云ふならば極端であるが、併し西洋史は近代になるほど文化的よりも文明的になつた來たことは爭へない。さうして文化的よりも文明的になるに從つて東洋への侵略が强化せられて來たことはまた明かな事實である。西洋文明は本來昔から多少とも奴隸制度の上に立つてゐるものであるが、それが近代に下るに從つてその傾向を顯著にし、遂には東洋全體を西洋全體の奴隸にしようとする傾向にまで發展し來つたのである。

文明は消費主義的なものであるとは云へ、そこに全然生產面がないとは云へないことは、機械工場內の活動が確に生產面を有するに徵して否定出來ない。とにかく都市的な文明には農村的文化よりも支配力や統制力に於いてまさつてゐることは明かであつて、そのために東洋は一時とにかく西洋のために殆ど完全に克服せられて奴隸化せられてしまつたが、大東亞戰爭はそのやうに一時殆ど完全に奴隸化せられた西洋文明への東洋人全體の覺醒と反撥と再起とを意味するのみな

らず、西洋文明そのもの丶價値と意義とに對する鋭い批判と反省要望とを意味するものとして日下大いに戰はれつ丶あるのである。思へば、西洋人と西洋文明とは何もそんなに驚くべきものではなかつたのだ。彼等には彼等としての優秀な點は確にある。我等に及び難い點も確にあつた。併しその優秀性は彼等自身が妄信し自負し、我等に宣傳し來つたほどのものではなかつたのだ。我等にはまた我等自身としての優秀性があり、彼等の到底企て及ばないところがあつたのだが、たゞ我等の優秀性は文化的であつて文明的ではなかつただけだ。自己支配的であつて、對他支配的ではなかつただけだ。彼等は文化的よりも文明的な事柄に長所があつたのだ。そして文明は文化よりも支配力に於いて强烈であるが故に、彼等の方が彼等よりも優秀なやうな錯覺を與へたゞけであつた。現代西洋文明のこの慘澹たる成れの果てを見るがよい。何處に人類の幸福があるか、何處に生存の意義があるか。この無意味なる大戰爭を、中止しようと思へば出來ないでもない筈のこの人類的悲慘事を中止することさへ出來ないではないか。これほど愚劣なる文明が何處にあるか。その愚劣文明の窮極の代表は實にアメリカである。

西洋文明はこのやうに根柢に於いて愚劣なものであるが、この愚劣なる文明を克服するためには、一先づこの文明を取入れて、その支配力をわが身に體得するより外に道はなかつた。わが國が開國以來、孜々として西洋文明を攝取して來たのは、卽ち彼の刄を奪つて彼を殪さんがためで

あつたと云つて過言でない。即ち、西洋文明はさう云ふ程度に於いてこれを攝取し、またその意味に於いて排撃しなければならぬものである。つまり攝取と排撃と二段の構へを取らねばならぬ。それは、つまり西洋文明の止揚であり、是正であり、それへの反省要望であると云ふことが出來るであらう。換言すれば、わが國開港以來今日までは攝取の構へをとつて來た時代であり、大東亞戰爭はその止揚への構へに移つたことを意味し、戰爭終了後はその反省と是正とを要望すべき構へに、即ち所謂「まつろはしむ」べき態度に入らなければならないのである。して見れば、相手が西洋文明であらうとユダヤ文明であらうと、ユダヤが西洋を代表してゐようとゐまいと、たゞそれに對して排撃のための排撃の態度をとると云ふことは、日本本來の國是に反するのみならず、大東亞戰爭をして聖戰たるの意義を喪失せしめるものでなければならない。日本の國是は八紘を被ふて一宇となすことにあり、從つて世界人類の一人をも排斥せぬと云ふ廣汎博大なる雅量を有するものであることは今更云ふまでもない。

これに反し排斥とは相手を已れと平等と認めないことである。共存共榮的態度を放棄し自存他衰的態度をとることである。勿論、相手が自存他衰的態度を以て我に臨む時は、我も亦、姑く共存的態度を止揚せねばならぬ。相手が排斥的であるのに、我のみ迎合的である時は、結局敗北主義とならなければならぬ。併しその時、我の排他は飽迄も手段であつて目的でないと云ふことを

忘れてはならない。目的と手段とを混同し、本末を顚倒する時、我亦相手と同じ立場に立ち、聖戰の意義を晦澁にするのみならず、相手の戰爭目的を却つて鮮明にしてやる結果となるであらう。

排斥とは相手を已れと平等と認めないことであると、さきに云つた。平等でないことの認識には二種類がある。一つは相手を已れよりも劣等なるものと認めること、この時わが方に優越感が生ずる。第二は相手を已れよりも優越であると認めること、この時わが方に劣等感が生ずる。優越感と劣等感とは屢々精神病理的傾向を帶び易いものであることを、私は心理學徒として敢て警告を發しておく。優越感は相手を奴隷化しようとし、その人格を無視し、漸次に相手の攻擊慾を怨恨と云ふ形で已れの方に誘發せしめるやうになる。それのみならず、優越感は人間としての已れの義務感と勤勞精神とを忘失せしめ、勞働を蔑視し有閑を名譽と心得、漸次に心身の墮落と廢滅の方に陷り行くやうになる。劣等感は相手を實際以上に高く評價すると云ふ妄想の上に生活を築き、已れの人格構築の努力を放棄し斷念するやうになるから、品性は下劣となり、何ら崇高なる精神的事業に堪えられないやうになるであらう。ユダヤを代表とする西洋文明への排斥者の間にそのやうな劣等感が根深く巢喰ふてゐるのでなければ幸である。

以上で、私はさきに掲げた二つの設問の內第一のもの「西洋文明の排擊は如何にして可能であ

るか、また如何なる意味又は程度に於いてなさるべきか」に答へたのであるが、それは同時に、大體に於いて、第二の設問「何故にユダヤをのみ問題にし、他のより實力あるものを輕視するかのやうな態度をとらねばならぬか」と云ふ問題にも答へたことになるのである。何故か、それはユダヤが西洋文明の間に持つ地位について考へれば直ちに判る。ユダヤは諸民族の内に於いて、最も畏怖せられ魔物視せられてゐる者であると共に、また最も輕蔑せられ、嫌惡せられてゐるものであるからである。云はゞ彼等は西洋諸民族間のタブーである。彼等は西洋諸民族の優越感の對象でもあり劣等感の對象でもあると云ふ複雜なる立場にある。我等東洋人はさう云ふ西洋的傳統と迷信の圏外に立つてゐる。何を苦んで、彼等のそのやうな馬鹿げた圏内に我等自身をまでも引込まねばならぬことがあらう。

以上、私はユダヤ恐怖的排斥論を批判して來たが、私は別にユダヤを辯護してゐるわけでないことは説明を要しないだらう。私はたゞ人間の精神と健康を圖ることを業とする科學者として、わが同胞が精神病理的傾向を以て現實に對處することを心配するあまり、その病的傾向を處置せんとしたに過ぎないのである。正しく敵を知り己れを知らば百戰勝たずと云ふことなしと云ふ意味の言葉が孫子にもあつたと思ふ。正しく自他を知ると云ふことは、現實觀察の心理能力が健全であると云ふことを意味する。それ故に、心理の健全は勝利の根柢であり、出發點でなければな

らぬ。これ神經戰對策の第一條である。

# 第三章　病氣治療としての大東亞戰爭

## 一、病氣發生の過程

私は精神分析者として常々神經症患者の治療に携つてゐるのであるが、神經症の發病過程や治病過程が、東亞諸民族の奴隷化及びその大東亞戰爭に依る解放過程と種々な意味で非常に似てゐることを思ふ。依つてその相似の關係及び意味を明かにすることに依つて、大東亞戰爭への我等の覺悟を深め、ひいては神經戰への用意を强める所以に資したいと思ふ。

胎兒は總てそれが未だ母胎内にある限りは原則として（病毒傳染や不具は別として）絕對健康狀態にあるものたることを私は確信すべき理由がある。その理由はこゝに細かく說くべき場合でないが、とにかく病氣への契機は出產と同時に始まるものである。と云ふことは、胎兒は出產と同時に外部の强烈な刺戟の前に曝されるので、その刺戟に對抗するために、今まで完全なる內向狀態にあつた本能力を漸次外向せしめることになり、その外向化過程に於いて本能力がそれ自身の內に含む矛盾のために危機に屢々遭遇し、その危險が大なる場合に破綻を生じ、破綻の結果が

病氣と云ふ形式をとるのだと云ふのが、私の神經病理學の根本的假定である。本能がそれ自身の內に含む矛盾とは、本能には全然正反對の性格を有する二種の傾向があつて、それを保存への傾向及び安定への傾向と名付けることが出來るのである。保存への傾向とは、地球の有する遠心力の生物に遺傳せられ變化したものであつて、與へられたる有機體としての存在（無機物から遊離したる一種の運動）をそのまゝ永く保存しようとする傾向であり、安定への傾向とは、有機物狀態をやめて元の無機物狀態に還元して安定せんとする傾向であつて、これは地球が太陽に對して有する求心力の生物に遺傳し有機的に變化したる傾向であると云ふのが、私の本能學說の根柢である。このやうに簡單に述べては誤解を招きさうであるが、詳しくは拙著『性格と意志』を參照せられたい。

地球の公轉自轉は、このやうに、相互に矛盾する遠心力と求心力との相互拮抗的妥協による調和の結果である如く、生物の公轉自轉たる生命の每日、每年、每生の反覆的な持續現象は保存と安定の二大傾向の相互拮抗的妥協に依る大調和の顯現である。この大調和は本能が外向化する過程に異變のあるとき、本來が相互矛盾的なものであるだけに調和を失ひ易く、調和を失へば相互に葛藤的、分裂的となるべきが當然であつて、即ちこゝから病氣と云ふ現象が必然的に生じ來るのである。

併し外部からの刺戟や壓力は不必要なのではない。否、むしろ必要なのだ。生長の時期、卽ち發達段階に應じて刺戟は適度に强化せられて行かなければならない。その刺戟は最初は物的なもの（空氣の壓力、寒暑、音響、光線など）であるが、次には父母の愛情や叱責と云ふ心理的なものとなり、最後には現實生活に於ける社會經濟的なものとなつて來るのである。何れにせよ、その時期、その發達段階に應じて全力を擧げて對應、抗爭しなければならない程のもの、全力を擧げさへすれば何とか處理出來るものであるべきであつて、全力を擧げるには及ばない刺戟しか與へられなかつたものは本能外向化の必要がないから外向化せず、從つて本能はその時の現在として不自然な狀態におかれ、分裂し、葛藤し、病的となるのである。

## 二、東洋諸民族の罹病過程

さて、このやうに神經病現象を考へて來て、東洋人全般の久しき病的精神狀態の由つて來る所以を考へて見るに、根本的に性格を異にする西洋文明の東漸は、云はゞ、東洋諸民族を精神的に痲痺せしめ、これを一種の神經症狀態に陷れたに等しかつたと考へることが出來るのである。姑く維新開港以來の日本民族の運命を主として考へて見ることにしよう。

德川幕府三百年の鎖國政策は、云はゞ日本民族を胎兒生活の狀態においたと考へることが出來

るであらう。この時代は外面的に見れば、世界の進運から取殘された暗國時代のやうに思はれるけれども、內面的に見ればそこには隨分種々な獨創的な文化文明が動いてゐたのだ。宛も胎兒が完全な無意識狀態の內にあつて完全な健康と旺盛な生命力とを潛めてゐるに等しいと云ふことが出來るであらう。併し江戶時代の日本民族も永くその浮福な退嬰的な隱退生活の中に沈淪してゐることは許されなかつた。外部からの西洋文明の壓力はいや應なしに日本民族を、鎖國の胎內生活から世界的な文運の激動の中に分娩せしめねばおかなかつた。それが維新當時の開港であり、歐化であつた。

併し胎兒にとつて現實外界は種々の刺戟や魅力を具へてゐる反面に種々の病毒や危險の襲來の機會を含んでゐるやうに、日本民族にとつても西洋文明は種々な啓發と共に千萬の危險と病毒とを齎した。が、その啓發は或る意味ではまた攪亂であり、危險と病毒とは却つて同時に健康增進の機會でもあつたことは、丁度、肉體にとつても黴菌が當然危險物でありながら或る意味では健康力への一層增大する契機であるのと同じであつた。かう云ふ言葉は常識的な人々にまで詭辯のやうに聞こえるかも知れないが、併し現に見よ、我々はワクチン注射と稱して、病毒を我等の肉體に故意に注入することに依つて、所謂抗體なるものを作らしめ、人工的に病氣になることに依つて、却つて健康力の增大を圖つてゐるではないか。

併し西洋文明の病毒は相當猛烈な勢を以て迫り來たがために、——宛もワクチン注射液のために病弱な人間は發熱して時に甚だ危險な狀態に陷ることのないでもないのと同じやうに——東洋の諸民族は或る者は全身的に病毒の侵攻のために犯され、或は半病人狀態に陷り、また或る者はこの注射の反應から正常な狀態に立直るまでに相當な時日を要することになつた。何れにせよ、東洋の各民族は殆ど總て程度の差こそあれ、病氣に犯されて百年乃至三百年の久しきに亙り、遂に慢性的病氣の狀態を當然の運命であるかのやうに斷念し錯覺し安信するやうになつた。それが所謂西洋盲拜病であつて、西洋の諸民族はまたそれをよいことにし、益々つけ上つて、自分の優越なるものを傲慢に盲信し、彼等また一種の神經病理狀態に陷つて、今日なほその病理性を自覺しない程にまで膏盲に入るに至つたのである。

私は右に、東洋の各民族、各國家が程度の差こそあれ、西洋文明の病氣に犯されて、慢性的病氣の狀態に陷つたと云つたが、中に就いて最も甚だしく殆ど完全に病毒の捕虜となつてしまつたものは印度を始め南方諸地域の諸民族であつた。次に半身不隨的な病氣に陷つたものは支那であつた。支那の租界なるものは西洋文明の病毒が內攻してそこに癌を作つたことを意味すると云つて過言ではなからう。比較的最も病勢の禍を輕く受けたものは日本であつたが、これとて人々が想像してゐるほどに輕いものではなく、英國大使館の敷地の如きは一種の租界的性格を帶びたも

ので、そこに於いて行はれる一切の行動は日本の法律や警察の權限外におかれ、やうやく昭和十二年になつてその改廢の交渉は佐藤外相の手により始められ、それが現實に實施せられ屈辱的な癌の切開せられるやうになつたのは大東亞戰爭勃發と殆ど同時であつた。




昭和十九年四月七日朝日新聞所載。何と肺病のレントゲン寫眞のやうな觀を呈してゐるではないだらうか。

このやうに、日本は西洋文明病毒の侵攻を受けることは最も少く、且つ最も遲かつたのであるが、このやうな結果の生じたのは、必ずしも日本民族が優秀なため、または生活力强盛なため——それも確にあるが——ばかりではなかつたのだ。その原因としては右の他になほ三つばかりを數へることが出來るかと思ふ。その一つは、日本が東洋諸國の內で、西洋から最も遠隔の地に位してゐるがために、そ

の勢力の波及を受けることが最も遲かつたと云ふ、地理的條件にあると云ふことが出來るであらう。第二は、西洋文明の勢力の大波が日本にやうやく及ばうとした頃に、西洋諸國の間に種々の相互的な競爭や葛藤が起つて、日本への魔手を十分に振ふ暇が彼等の何れにもなかつたと云ふこと、即ち幸運なる偶然的原因。第三は、永年の鎖國狀態が一種の消毒または隔離の效果を發揮して、流石の病毒も深く內面に滲透することが出來ず、自然立遲れとなつたこと、これも偶然と云へば云へるが、見方に依れば、日本民族の賢明なるためであるとも云へる。德川幕府の鎖國政策は固より幕府が已れの政治的勢力を永く保存するための、云はゞ利己的な、消極的な目的のために行はれたのではあるが、それが偶々日本の底力を養ふための效果を齎した功績は、偶然とは云へ、これを認めねばならないのである。早產の子供よりは滿十ヶ月胎內にゐて十分に胎內の營養を吸收した子供の方が概して健康であると云へるのと同じであらう。印度や支那は鎖國をしなかつた。否、鎖國したいにもその暇さへない內に病毒は全身を犯して了つた。その程度は地理的に病毒（西洋）に近接して位してゐたものほどその距離の短かさに正比例して甚だしかつた。かくて印度は全身病毒に浸蝕せられて了つた。印度よりもやゝ遠隔の地にあつた支那はところどころに浸蝕の痕跡を殘して、租界と云ふ癌を作り出したことは、前に既に述べた通りであるが、わが日本とてもその癌が全然なかつたわけでなかつたことは、これまたさきに既に述べた。

## 三、東洋諸民族病氣化の內容

さてその東洋民族の總てが陷つた病氣とは如何なる性狀のものであつたか。その主要症狀は彼等が精神的獨立性を喪失したと云ふことであつた。自分の力で考へ、自分の判斷に從つて行動する機能を喪失したことであつた。宛も狐憑きが——そんなものがあるかないか固より私の知るところではないが、假りに俗信に從つて在るとして——自分自身の思考力や行動を喪失し、その思考と行動とは總て狐のそれに外ならぬと云はれてゐるやうに…。從つて自身を獨斷的に劣等なものと定めて了ひ、沒批判的に狐を優秀なものと盲信し、狐の判斷に從つて思考し行動することが自分自身の獨自の思考力や行動願望に從ふよりも正當なこと、健全なこと、立派なことであるときめ込んでしまふやうになつてしまつた。宛も幼兒性を多分に保存してゐる神經症患者が、既に年齡的に肉體的に成人してゐるに拘らず、人格としての獨立性を有せず、親や上長や先輩の指圖に盲從するより外に道はないのと、正に同じである。このやうな傾向を見てとつた西洋の狐どもは、それを奇貨として益々その傾向を助長して、所謂愚民政策なるものをとるやうになつた。このやうな傾向を最も露骨に代表してゐるものは英國であるが、オランダその他も多少ともこの傾向を領前してゐないものはないと云ひ得る。

このやうな事實は、實に東洋民族全體の神經症化に外ならない。然るに、私の分析治療家としての經驗によると、個人の神經症と云ふものは、その人の出産以來、その生長發達の段階に應じて適度なる外部の刺戟を――卽ち始めに寬に、後には漸次に强烈なる刺戟を――受けなかつたものが、自分の本能の外向化の機會を得なかつたところに發生するのである。本能力は外部の刺戟を受けるところに外向するのであるが、その刺戟はその發達段階に於いてともかく全力を擧げて對應しなければならない程度のもの、全力を擧げさへすれば何とか支配出來るものが適度の刺戟であつて、それほど全力を擧げるに及ばないものである場合には、本能力は外向化を無性にも怠るのである。それは宛も我々が角力をとるにしても、碁將棋を戰はすにしても、相手にとつて不足のないものが面白く、とても自分の手に負へないもの、相手にしても始まらぬやうな微力なものでは面白くないのと同じである。

このやうに考へて見ると、印度や支那はあまりに早くあまりに强度の外的刺戟を受け過ぎて、本能外向化の機會を封ぜられた場合であり、わが日本は先に擧げた三つの理由に依つて、適度の刺戟を適度の時期に受けて來て、一時は病氣に負けさうな時代もあつたとは云へ、遂にそれを克服し、自家藥籠中のものとなし、却つて以前よりは一層健全に育つた人間に等しいと考へることが出來るのである。私はかつて幕末維新當時の日本の開國事情を病氣克服の過程に譬へて、次の

やうに述べたことがあつた。

「幕末當時の日本全國の國狀は、丁度、恐ろしい病毒に感染せられた生體の如き有樣であつたと云つて過言でないと思ふ。ハリスや黑船は云はゞ黴菌であつた。日本は從來鎖國の田園生活を送つてゐた爲めに、その國家的生體の血液にまだ抗體が發生して居らず、病毒の攻勢に對して確乎たる態度をとることが出來なかつた。病毒の感染を受けた者は今日でもなほ二種の處置法を薦められる。一つは消極的に、その病菌を消毒しようとする方法であり、他は積極的にその病毒を受容れておいて、それに對する抗體を作ることに依つて生活の健康を一層增進せしめようとすることである。幕末時代に於ける日本朝野の對黑船態度は正にこの二種の態度に外ならなかつた。即ち、前著は消極的な攘夷論者であり、後者は積極的な開港論者である。開港論者は亡國主義的な暴論家であるやうに思はれたことは極めて自然であつた。當時に於いては、本人等自身さへ多少の不安もあつたと思ふ。

下田は丁度、その病毒の侵入して來た傷口であつた。そこには黑船と云ふ媒體に依つて、ペルリだの、ハリスだの、ヒウスケンだの、通商、新文明、條約、威壓、好意的勸告などさまぐ〵な病菌が侵入して來た。それに對して日本と云ふ生體は、盛に抗體を作つてそれに對應するやうに努めた。即ち、その抗體とは、江川太郎左衞門の反射爐だの、砲臺だの、唐人お吉だの、お福だ

たのである。このやうにして病菌は受容れられて、日本の生體は却つて頑丈になつたのである。」

このやうにして西洋文明を克服して一層健康化した日本民族がやうやく自立の精神の回復し本來の判斷力を以て自分の周圍を見廻すやうになつた時、自分よりも一層深刻な症狀に陷つてゐる近隣の諸民族に氣付いてこれを救はうと云ふ氣になつて立上つたことは當然であり、それは單に近隣の諸民族を救はうと云ふ愛他的行動であるばかりでなく、また近隣に病人がゐてはまた自分等が元の默阿彌になるかも知れぬ危險から己れを守るための自衞行爲でさへもあるのだ。かくて大東亞戰爭は始まり、それはまづ、その目的を明かに意識してゐたか否かは姑く別問題として、支那事變と云ふ形式をとるやうになつたことは、これまた自然でもあり當然でもあつた。

然るに重慶支那はわが眞意をいつまで經つても理解しようとせず、病菌米英と結托して執拗にわが治病努力に「抵抗」しつゝあるが、これは正に我々の精神分析治療過程に於いて、患者が一面癒りたい意識的存在はありつゝも他面に於いて無意識的には、分析法の治療努力に反抗するのと一致してゐる。病氣に囚はれたものにとつて、病氣狀態は確に一種の安定狀態に外ならぬからだ。それは籠の中に居馴れた小鳥にとつて籠の外に出ることは不安であり、從つて籠の中から解放せられることが追放せられるかのやうな恐怖を意味するのと同じであらう。

## 四、現代世界文化の病狀

私は西洋文明を病毒呼ばはりをしたが、或る人々はそれがあまりに偏見的であると考へるばかりでなく、從來私が西洋文明に對してとつて公平寛大な見解と矛盾するものであると批難的に考へるであらう。尤もである。で、私はこゝで西洋文明の發達又は退化に就いて一應論及しておく必要を感ずる。

私の郷里は神戸市である。私が少年時代を送つた頃の神戸は開港場の隨一として、多くの西洋人が入込み、市内には居留地と稱して彼等の劃居する一廓があり、傲然たる態度で彼等は市中を横行してゐた。我等少年のみならず大人たちも西洋人と云ふもの全體に對して、それが何れの國籍に屬するものであるかの區別を立てる暇さへなくて、一種尊崇の眼を以て仰いでゐた。辯護士であつた私の父貞夫は時代の動きに敏感であつて、私に早く英語を習はせ、小學二三年級の頃から私は舶來の英語教科書ナショナル・リーダーやロイヤル・リーダーの異國的な紙やインキの匂ひに胸ときめかせながら、市中の英語學者の私塾に通はせられたものであつた。それ等の教科書の内容は今にして思へば、實にその大部分が農業的な主題を取扱つたもので、當時英國は未だ殆ど完全な農業英國の雰圍氣を――産業革命後であつたにもせよ少くともその雰圍氣は――湛へ

てゐたものであることが察せられる。

私はこゝで一見唐突ながら、文化と文明との區別を說いておかねばならぬ段取に達したのである。文化（カルチュア、クルツール）は英語に於いてもドイツ語に於いても本來農耕と云ふ意味の語であり、文明（シヴィリゼイション、チヴィリザチオン）は都會化の意であることは人々のよく知るところである。然るに農耕は主として生產者の仕事であり、都會は主として消費者の集まるところであることは――勿論、農耕者も消費はするし、都會人も何らかの生產をしないわけではないけれども。――これまた今日の常識である。ところで、生產は固より消費のためのものであり、消費は生產のためのものであつて、何れを主とすべきであるとは云へない。結局、生產を消費することに依つて一層大なる生產へと進むこと――積極的消費主義と名付けておかう――が健全なる經濟生活でなければならぬが、こゝに困つたことには、文明の進步は積極的消費主義の道德を知らない生產者と、消費のみを知つて生產と云ふことを與り知らざる消費者とが派生して來て、それが漸次に數的增大の過程を辿り、兩者が階級的に分立して、共に不具的な生活を送るやうになつて來た。それが所謂階級分立と云ふことであり、かくて分立した双方の間の利害の衝突から鬪爭――永久に解決を見得ざる鬪爭――を生ずるやうになつた。それが近代西洋文明の痛弊であつたが、東洋に於いてはその弊は西洋に於けるやうに甚だしくはなかつた。と云ふより

は東洋全體が一般的に云つて積極的消費を知らざる生産者、即ち被搾取者の位置に轉落せしめられ、西洋全體は他人の生産を消費することに何らの罪惡感を覺えざる搾取者と墮して來たのである。所謂産業革命は西洋全體がこのやうに破廉恥なる消費者となつて分業するやうになつた契機であり、それ以前に於いては産業革命の本場たる英國に於いてさへ――さきに敎科書に就いて見たやうに――なほ文化の匂ひを多分に殘せる農業國産業國であつたのだ。大東亞戰爭は實にこのやうに東洋全體を被搾取者として、消費の道德を忘れさせられたる生産者としての位置に墮せしめられた事に對する我等の憤りの勃發――民族的階級鬪爭――であると共に、生産の意義と道德とを忘れたる西洋の代表英米に對する反省の要求でもあるのだ。こゝにこの戰爭が單に主我的な階級鬪爭的性格を超えて、敵を救はんとする人道的正義の戰爭たるの實の存する所以があるのだ。人間は常に三種の生産――子孫を作る性的生産、物資を作る肉體的生産、文化を作る精神的生産――に堪えるやうでなければならぬ。

それにしても西洋は、殊にその最近の代表米英は、生産的な農耕文化を離れて消費的な都市文明に就くやうになつたのは何故であらうか。これはなか〳〵大問題であつて、こゝでその原因を簡單に斷定して了ふことは出來ない。たゞ感情的に、米英やユダヤは民族性格的に搾取的に出來てゐるのだと云ふやうな斷定を下してよい氣持になつてゐる事が出來る人々は寧ろ幸であるだら

う。併し我々の科學的精神はそのやうな感情論で滿足することは出來ない。

社會學的に云つても、農村生活から都市生活への發展は、とにかく或る意味での進歩であるには相違なからう。經濟學的に云つても、物々交換の經濟から金融經濟への變化は、一種の進歩であるのを否定することは出來ない。工學的に云つても、手工業から機械工業への發達は、やはり進歩であることを否認すべき理由はない。心理學的に云つても、肉體勞働から精神勞働への變化は、これまた確に一種の進歩である。このやうに人間の社會生活は進歩にせよ退步にせよ、とにかく或る期間の經過に伴ふ必然的な變化に於いて、右のやうな方向をとることは當然であつて、それは一二の個人や民族の性格や傾向に依つて左右せられたり、又は決定せられたりするやうな單純な現象ではないのである。

何れにせよ、進步であるには相違ないにしても、進步であるから必ず全面的に價値があり、人類に全面的に幸福を齎すときまつたものではない。進步は人間性又は社會生活全體の他の方面の犧牲に於いて、——換言すれば他の方面の退步を必然的に伴ひつゝ——遂げられるものであるから、一つの進步は或る程度まで行くと、やがて行詰りに直面するやうになつて來る。別言すれば、人生の事は總て矛盾の拮抗的妥協の上に成立つてゐるものであるから、その妥協が或る程度まで進步すると、やがてそれ自身の內なる矛盾が馬脚を露はして來て、動きがとれなくなつて來るの

である。農耕的文化から都市的文明への進歩もその數を免れることが出來ず、米英はあまりに變態的に進歩した都市的文明のために農耕的生産の必要面を他國、又は他族に仰がなければならなくなり、こゝに東洋全般を農耕的階級として隷屬化しなければ自給自立出來ない憐むべき不具者となり下つたことは、丁度、あまりに尨大に進展した都市が一朝非常時に直面するとそれ自身の自給が出來ず、忽ち飢餓と貧困の巷と化してゐるのを我々が目前に見るのと同じである。

これは都市や國家に就いてのみ云はれるべきことではなく、個人に就いても妥當する命題である。現代の都會人はあまりに頭でつかちであつて手足のない怪物と化し去つて了ひ、勞働の神聖と必要とを忘れて、觀念と享樂の世界に彷徨するより外に能のないものと墜落して了つてゐるものが大多數であると云つても必ずしも過言ではなからう。人間は常に三種の生産——子孫を作る性的生産、物資を作る肉體的生産、文化を作る精神的生産——に堪へ得るやうでなければ健全な生活とは云へないとは、私の豫々の主張である、然るに、現代都會の內には性的生産に堪えざる不能症者、冷感症者、物資生産に堪へざる體力薄弱者が多いのに反し、農民の間に文化的生産には全く緣遠い存在と墮してゐるものが大部分であると云ふ有樣となつて、國家社會はこれを全般的に見て、頗る不健全なる分裂的、分業的、變態的樣相を呈してゐるのである。人間は如何に進步しても、遂に人間として全體的存在であつて、文明や産業は如何に分業化し得ても、人間は機

械的な分裂をなすことが出來ない。筋肉運動をなさざる精神運動は結局、聲のみあつて姿なき亡靈の如き存在に過ぎない。

産業革命後の英國にも流石に人間的な全體主義生産への要望に眼醒めた思想家（ウヰリアム・モリス）もゐた。けれども現代の英國は彼の文明批評的警告に覺醒するには、その病根はあまりに深く彼等の生活を蝕んでゐた。大東亞戰爭に依つて一大痛棒を喰ふまでは、遂に覺醒には到らないであらう。「日本を文明から閉出せ」などと時代遲れの、思ひ上つて呼號を續けてゐる限りはまだ自分の現在の症狀や、彼等が自分の特産物であるかの如くに自惚れてゐる所謂文明の價値や意義に就いて反省と自覺とのないことは明かである。文明は文化的性格を失はない限りに於いてのみ價値があり、文化は文明的傾向を帶びてゐる限りに於いて生命がある。文明に文化的性格を取戻すことが來るべき時代の人類生活の努力の中心であらう。都會人が農村に疎開し、都市の中央に菜園が簇生しつゝあることこそは、來るべき文化的文明の象徵的顯現であると見ることが出來るであらう。大東亞戰爭は實にこのやうな新しい時代を生み出すための陣痛であり、日本はその産婆役を果しつゝあるのだと云ふことが出來るであらう。

# 第四章　アメリカは結局敗ける

## 一、優越感のための戰爭

アメリカの物量的壓力に對してわが國民の一部分の者は何糞と勇敢に反撥してゐるが、他の一部の者等は氣持の上でやゝ押され氣味になつてゐるのではないかと思ふ。で、私はこゝに彼等の強さうに見えるところに却つて彼等の非常な弱點の存することを心理學的に分析して、結局アメリカは敗けるのだと云ふことを證明して、悲觀論者たちの惡夢を醒ましてあげようと思ふ。

御存知の通り、アメリカは現今、ヨーロツパとアジアの各方面に大軍をばら撒いてゐるが、彼等の戰爭目的は何かと云へば、いろいろの解釋を下すことが出來るであらうが、これを心理學的に云へば、對歐洲の戰爭はアメリカの歐洲に對する傳統的な劣等感を補償して優越感に置換へるためであると云ふことが出來る。わが外交界の大先輩本多熊太郎氏は、アメリカの歐洲派兵は英國の遺產相續のためであると云はれたが、それは或る意味では確にさうに違ひない。ポーランドがドイツに席捲せられさうになつた時、ソ聯は突然出兵してポーランドの東半を保障占領をした

が、それが結局、獨ソ戰爭となつた。それと同じ意味で、イギリスはドイツに席捲せられさうになつたので、全部ドイツにとられてはたまらぬから、アメリカがドイツの先手を打つてイギリスを保障占領して了つて、結局、獨米戰爭となつてしまつた。それを遺産相續の戰爭だと云へば、云へる。

また、ビルマ戰線で捕虜になつた一米國將校は日本新聞記者の質問に答へて「米國の戰爭目的は持つてゐるものを失ひたくないことである」と云つたと云ふことで（十九年三月七日毎日新聞）、實際は先に持つてゐた以上を持たうとしてゐるのに、かう云ふことを云ふのは、彼の意識としてはフィリッピンなどを失ひたくないと云ふ意味であらうが、無意識的には彼等が從來、アジアに對して持つてゐた優越的地位を失ひたくないと云ふ意味に外ならぬであらう。對獨戰爭にせよ、對日戰爭にせよ、米國の戰爭目的は彼等の祖先又は英國の遺産を相續しようとするにあると云はば云へるが、これは物的な意味であつて、心理的に云へば優越感の維持又は擴大のためであると云つて正しいのだ。今までアメリカが歐洲の代表たる英國に對して持つてゐた新興國、成上り國としての劣等感を補償して優越感に置換へようとしてゐるのだと云ふことが確に出來る。

これは成程一應尤な心理であつて、誰でもいつまでも劣等の位置に甘んじてゐてよい筈のものではない。併し彼等の優越感の内容が問題であつて、たゞ物や形の上での優越感を築き上げよう

と云ふのが彼等の目的であつて、心や實質の上での優越をそこに伴はねば意味のないと云ふ最も大事な點を忘れてゐる。彼等は以前から何でも世界一を欲してゐたのはそのためであつて、世界一の摩天樓を作つて見てそれにエムパイヤ・ビルディングとか云ふ名前をつけてゐるところに、彼等の劣等感や優越感の實質的內容が象徵的に馬脚を露はしてゐると思ふ。世界一に高いビルディングを建てゝ見て何の意味があるのか。たゞ不安定で、昇降に骨が折れて、能率が上らず、且つ生活が大地と離れて不自然になるだけの話である。併しこれは精神的な高さを求める代りなのである。即ちそこに彼等の無意識的の劣等感が仄見えてゐると解釋して差支へないと思ふ。だから彼等は歐洲戰爭に於いて、連りに諸方面の由緖ある建築物を破壞してゐる。それは劣等感のためだと、ドイツの宣傳相ゲッペルス氏が、ケルン寺院の高塔の破壞せられた時に喝破したのは本當である。摩天樓はいくら物的に背は高くても、たゞグロテスクなだけで、ケルンの塔のやう精神的な高さと美しさとがないことは、彼等もよくこれを自認してゐるだらうからだ。

アメリカの對歐洲戰爭の心理的目的がこのやうに精神的劣等感を補償するに物的優越感を以てすることにあると云へるならば、對東洋の心理的戰爭目的はその物的優越感を持續貫徹することに依つて、舊來歐洲人全體が東洋全體に對して持つて來た物心兩方面の優越感を遺產相續しようとしてゐるのだと云へるだらう。この優越感は今や完全に崩壞して了つてゐるに拘らず、それを

正直に承認しなくたい頑固さに彼等は血迷つてゐるのだ。もしアメリカが精神的な優越性を以て東洋に臨まうとするならば、或はこの戰爭目的は成功することがあるかも知れないが、物量的優越性を以て臨まうとしてゐるところに、この目的の結局は失敗に終るべきことが明かに約束せられてゐるのである。

思へば、東洋人は久しく西洋人の優越を迷信し錯覺して來たのだ。併しそれは結局、たゞ鐵砲を彼等が早く手にしたと云ふだけの事に外ならなかつたのだ。或はそのために、鐵砲を早く持つた人間の立場に立つて物事を、殊に東洋文化の價値を、見ようとし過ぎて來たことに外ならなかつたのだ。勿論、西洋人には東洋人に出來ないこと、又は不得意なことの數々が出來るが、東洋人には西洋人には出來ないこと、又は不得意なことの數々を立派になし得る能力が具はつてゐるのだ。併しそれ等は西洋人の見方に卽して見る時は、全く無價値なものに見えて來てゐたのだ。が今や東洋人は眼醒めた。大東亞戰爭は東洋人全體の、この久しい惰眠への警鐘であつた。今や警鐘は益々激しく亂打せられつゝある。愈々益々その激しさは加へられねばならぬ。

それ故に今日以後、もしアメリカがその物量の力を以て假りに再び東洋を征服し得たとしても、彼等が過去に於いて有してゐたやうな優越感の肆な享受は、も早不可能であると云ふことに氣付かねばならぬ。それは既に、今は歸らぬ退去の夢であるのだ。

眞の勝利は勝者の優越の上にではなく、勝利者が實施せる正義の上に、さうして敗者の已むを得ざる屈從の上にではなく、心からの尊敬の上にのみ成立ち得るのである。その優越はたとへ精神的優越であつたとしても、勝利の基礎となるには足りない。まして物的優越などにはその基礎となることは出來ない。優越的勝利は常に反撥と反逆の危險を孕まなければならぬ。アメリカはこのやうに不可能を計畫するものである。不可能は萬能の神さへも遠慮する筈のものだ。まして、萬能どころか、缺點だらけのアメリカ輩の力を以てしてをや。これ、アメリカが結局敗北するにきまつてゐると云ふ推論の第一の根據である。

## 二、世界を敵に廻す戰爭

第二の根據は第一の根據から必然的に出て來るもので、無理押しのために世界全體を敵に廻してその恨みを買ひ、歡迎せられざる客となつて毛嫌ひせられ、遂には世界中から閉出しを喰ふやうになるであらうと云ふことである。

アメリカの勝利を喜ぶものが何處にあるか。日本やドイツやイタリーが喜ばぬのは當然であるし、南米の諸國や歐洲やバルカン方面の中立國も喜びはないし、それどころか同じ陣營內のソ聯や英國さへも決してこれを心から喜ぶものではない。只今は假りにその力を利用しようとして、

慢してその不滿を表面に露出させないだけのことである。喜ぶものがもし何處かにありとすれば、今や完全に精神病化してゐる重慶政權くらゐのものであらうが、それとて心ある者が果してどこまでも喜ぶか、固より當てにはならぬであらう。元來、重慶政權に同情のあつたかのアメリカ式の支那評論家林語堂の如きでさへ、林語堂は發狂したのではないかとアメリカ人を驚倒させた程の辛辣な語調を以て、アメリカの東洋人に對する無禮を難詰してゐる。「將來支那がどうならうとも、日本と同樣強くならない限り、アングロサクソンが支那に對して本當の平等を與へないことを今日自分は悟るに至つた」と。かゝる悟りは大東亞戰爭の警鐘に依つて與へられた覺醒にあらずして何であらうか。

　まして近頃は政治攻勢と稱して、諸方の中立國を威嚇しつゝある。而も、味方にならねば物を遣らないと云ふ、極めて下卑た條件で威嚇しつゝある。併し中立諸國もさるものであつて、なか〳〵勇敢に反撥し抵抗しつゝある。却て米英の方が男を下げつゝあるやうな有樣である。このやうに無理押しをして恨みを買へば、アメリカへの尊敬、即ち服從心、勝利願望は漸次に消滅して行くであらう。米英兩國の同盟は世界を敵に廻すものであるとの說は英國の科學小說家H・G・ウェルズの道破するところであつて、彼は一九四四年頭初(?)ピクチュア・ポスト誌に寄稿した一文に於いて「英米の指導者たちは現在の危機に於いてますます無責任な態度を執り、會議か

ら會議へと飛び廻つては計畫を一夜漬けで起草してゐる。かゝる無思慮なる行動の結果として彼等は英米兩國の永久的同盟を執拗に追及してゐるのであるが、もしかゝる英米國の永久的同盟が實現すれば、これは世界に對して鋒を向けるものである」と叫んだと傳へられてゐる。このやうに英國内に於いてさへも心ある者は米國の無理押しに顰蹙しつゝある。卽ちアメリカは勝利者としての精神的資格のないことが愈々明かになりつゝある。

人間は無理なことをしてはならない。無理をすると云ふこととは、自分の實力を過度に不自然に用ゐることに依つて、自分の體勢を危險な狀態におくと云ふことである。云ひかへれば自分の力で自分が負けさうな立場に立つと云ふことである。自分の刄を相手に渡して自分を斬らしめる可能性が增大すると云ふことである。例へば、相撲に於いて、土俵際で無理押しする時は、屢々自分の方が却つてウッチャリを喰ふやうになるのと同じである。アメリカは只今さう云ふ無理なことをやりつゝあるのだから、我等はその無理の力を自然の力のやうに錯覺して恐怖することはない。その無理に出されてゐる力の弱點こそは、我々の最も利用すべき好き機會でなければならぬのである。尤も、その時、我等の方でもやはり、そのおつき合ひで無理な力を出すべく餘儀なくされるやうになると云ふ危險には十分に自戒してゐなければならないが……。

## 三、良心を裏切る戰爭

第三の根據はやはり前二者と密接な關係を有するものであるが、アメリカ人の戰爭良心が漸次に破綻しつゝあることである。彼等は日本人を地上から抹殺しなければならぬとか、日本の男兒を全部去勢するとか、日本人は「人間以下」（サブヒウマン）であるとか呼號しつゝあるが、併し日本人がやはり歴然とした人間であり、殊に東洋人の間でも特に優秀な人間である位のことは、彼等の常識がそれを承認してゐない筈はないのである。たゞ日本人の爲すところが彼等の道德標準で理解出來ないところの多いのは事實であらう。例へば、日本軍人のみならず軍屬までが刀折れ矢盡きた時には潔よく玉碎し、決して降伏と云ふことをしないその心理に對しては、彼等は相當に惱まされてゐることは事實である、彼等ならばその義務を既に果したのだからと云ふ建前で、公然と降伏して何ら恥辱でないところでも、日本人はそれを恥辱として敢へて敵の軍門に降らぬと云ふ彼等の所謂「無降伏の哲學」の前に彼等は相當に面喰つてゐるのである。「大抵の英國人にとつて日本人と云ふものは全く謎である。彼等の態度は我等のそれと非常に違つてゐるので、米國人は日本人を狂信的性格なのだと簡單にきめてしまふ傾きがあるが、日本人は事實熱狂以上のものを持つてゐるのだ。現に今次の戰爭に於ける日本軍の姿を見よ。彼等は敵に對して

假借なきのみならず、自分に對しても冷嚴そのものである。これが我々の當惑する點なのだ。しかし虜囚の安全さよりも、むしろ自決を選ぶ彼等の信條は、往々にして戰場の狂亂が生み出す異常な勇敢さとは全く別物なのである」云々と、米誌ライフ昨年十一月號に記者は述べてゐると云ふ。

このやうな無降伏の哲學は彼等の常識で野蠻主義、人間以下主義として片付けて見ようとしたのであるが、どうもそれでは割切れぬものゝあることを認めないわけに行かなくなつたことが歴々と右の記述の中に見えてゐる。或る日本人は彼等がこれを日本人の野蠻主義として片付けてしまつてゐると考へてゐるかも知れないが、私は心理學徒として彼等をそれほど非人間的なものとは考へられない。凡そ人間である以上は、これだけの壯烈な行爲に對して何らの感銘のない筈はない。それにも拘らず、彼等は日本人を人間以下（サブヒウマン）であると强ひて刻印を下さうとしてゐるが、その心理過程に相當の無理のあることは見遁せない。意識的にさう云ふ無理な考へを强調しようとすればするほど、それに正比例して無意識的には良心の破綻が甚だしくなつて來る。一部のアメリカ人の間にはガダルカナルに於ける米軍の慘虐な行爲に對して批難する者があつたし、歐洲第二戰線の延期（實は中止）說や、闇くもな無條件降伏主張への反對說も相當根强く行亙つてゐるのは事實である。

一體、米英がキリスト教的博愛主義の傳統に拘らず、病院船爆撃を執拗に繰返したり、寺院や文化施設を沒義道に盲爆したり、殘忍非道の限りを盡して顧みないやうに見えるのはどうしてゞあらうか。それは彼等の本性が殘忍冷酷なためであると云ふ解釋がわが國の一部に行はれてゐるが、私は必ずしもさうばかりとは云へないと思ふ。勿論、彼等の本性が絕對に冷酷でないと私も云はうとは思はない。博愛主義が强調せられたと云ふことは寧ろ彼等が本來博愛的でなさすぎるところから、已むなく强調せられた考へであつて、昔の支那に孝道が特に强調せられたのは當時の支那に孝道が甚だしくすたれてゐたゝめであるのと同じである。自然に行はれてゐれば、特別にそんなことを主張する必要がない。併し土臺、人間と云ふものには攻擊本能や破壞衝動なるものがあつて、從つて一面冷酷なものには相違ないが、その反面には良心や溫情があつて、その冷酷さが中和せられてゐるものであるが、或る時にその冷酷さだけが特に强く前面に出て來るのは如何にしてであるかと云ふに、それは姑く良心や溫情の命令に頰張りをしてゐなければならないほど、でなければ自分の足場が危くなつて來てゐるほど客觀的情勢が緊迫の度を加へてゐる時にさうなるのであつて、現在、米英が日本に對してもドイツに對しても印度に對しても、人間性の自然に反して甚だしく殘酷になつてゐるとすれば、それはそれだけ彼等の足場が危くなつてゐることを意味してゐると共に、他方に於いて彼等の良心がそれだけ頰被りの中に押し込められ、歪め

られて、苦しめられてゐることを意味してゐるのである。

ところが良心と云ふものは、頬被りの中に押込められてゐても決してそのまゝおとなしく居眠りしてゐるものではなく、その頬被りの中で虎視眈々と反撥反撃の機會を覘つてゐるものであつて、その反撥反撃は他人に向つて發せられずに自分自身に向つて發せられるのであつて、かくて本人の自己破壞、自滅作用が營まれることになるものである。良心は頬被りをせず、これを旗印のやうに堂々と表面に押立てゝ進む時は、換言すれば、良心と共に戰ひに臨む時は、これほど力强い味方はないのである。大義名分の明かな戰ひとか、目的の判然とした戰爭とか云ふのはさう云ふのを云ふのであつて、つまり軍旗や名分は良心の象徴であると云ふことが出來るのである。

何故ならば、良心はその成立や發達の過程を心理學的に調べて見ると、攻擊性を骨骼として、それに愛情の肉づけがしてあるものであつて、もしこれを永く頬被りの日蔭者狀態におく時は、その肉は痩せ細り、脫落して骨ばかりの骸骨となつて、自分自身を死の深淵に引き摺り込まねば已まぬやうになるものである。

以上、私は三つの理由を擧げてアメリカ敗北の必然性を說いで來た。併し勿論、これ等三つの御題目を唱へてをれば、我等は何もせずとも米英は自然に敗退して行くなどと云はふとしてゐるのではない。軍備は大いに整へられなくてはならない。戰爭は勇敢に戰はれなければならない。

敵の物量は破碎せられなければならない。併しそれでも敵の物量は我等の破碎力を一時的に乘越えて來ることがあるかも知れない。現に南方では或る程度まで乘越えて來てゐるが、併し我等に必勝の信念あり、先方に良心の咎のある限りは、敵の物量は必ず行詰る時があると云ふことを確信せねばならない。

或る人は、右に私が擧げて來たアメリカの精神的弱點を、アメリカ必敗の理由とするに薄弱だと云つた。それは勿論、私とて、それだけでアメリカが自滅するものではなく、我方が良心を味方につけて軍備の物量的基礎を確立するのでなければ、一時的にはわが破碎力を乘越えて來るかも知れぬと云ふことは、さきに私の說いた通りである。併しよしんばさう云ふことはありとも、「結局は」アメリカは敗北するのである。敗北せしめねばならない。それが所謂必勝の信念の實質的內容である。もしこの實質的內容への理解がなく、根據として薄弱だなどゝ常識的なことを云ふならば、その人は日本精神を理解せざるものである。何となれば、私がさきに擧げたアメリカ敗亡の三つの理由なるものは、わが大東亞宣言の精神に正反對なアメリカ精神の三つの特徵を擧げたに外ならぬからである。大東亞宣言の精神に中心から貫かれてゐるものは、アメリカの終局的敗北を確信してやまないであらう。

とは云へ、必ず樂觀しすぎてはならない。敵は心理的弱點から破綻しない前に物量でひた押しに押して來ようとしてゐるのだから、我等はやはり相當の物量を以てそれに對應しなくてはならない。たゞ近頃は、精神や良心や大和魂は問題でない、ひたすら量を以て量に對抗せねばならないと云ふやうな思想が、一部日本人の間を風靡しつゝあるかのやうに見えることを不安に思ふのである。

## 四、玉碎と良心

「戰爭は土地をとられても負けたのではない、退却しても負けたのではない、負けたと思つた時が負けたのである」とフランスの名將フォッシュ元帥は云つたと云ふことである。確にそれには相違ない。併し負けたと思つても思はなくても、全部が殺されてしまつたら負けたのと同じことになつてしまふ。玉碎者は負けたのではない。精神的には斷然不屈であると云ふことを顯揚してゐるものである。併しそれは後になほ大勢の味方があつて、それ等の者が玉碎者の精神を生かしてくれることを期待出來る場合に於いてのみ意義があるのである。日本國民の全部が玉碎して了つたのでは意味はないことになるから、用意を怠つて、もしさう云ふことになつてしまふやうでは、折角前線の玉碎の諸勇士たちに對して申譯のないことになる。それ故に、敵が物量を恃ん

で臨み來るならば、我亦相當の物量を以て應へなければならぬ。併しながら、それ故とて物量萬能主義に陷り、精神や良心の力を輕視するやうなことがあつたとしたら、それは敵に同一化したことであり、つまり精神的に敵に敗北したことになるのである。

「負けたと思つたときが負けたのだ」と云ふ言葉の眞の意味は何かと云へば、それは精神的に敵に屈服したと云ふことである。精神的に敵に屈服したことは、敵が正當で自分の反抗が誤りであつたと思ふと云ふことである。換言すれば、自分の良心の破綻を意味するのだ。良心の權威が自分の魂から消え去るとき、人々は直ぐに負けたと思ふやうになる。さうしてその時、敵が良心を代表するものとして權威を以て我に臨み來るやうに思へて來るのである。

「負けたと思つた時が負けたのだ」と云ふ言葉は立派な言葉であるが、併しさう思ひさへしなければ、「土地をとられても、退却しても負けたのではない」と云ふ考へ方は、或る意味では高く正しいが、別の意味では相當の危險を孕んでゐる。不屈の精神を表はしてゐると共に、負け惜みの剛情を表はしてもゐる。土地をとられたり退却したりしたことはその限りに於いて確に物的に一時的には負けたことに相違ない。それをしも負けたことにならないと云ふならば、降伏しても負けたとさへ思はなければ負けたことにならないと云ふ論理も生じて來る。恐らく米英の捕虜たちの大部分はさう考へてゐることであらう。

結局、一番大切なことは、戰爭目的に就いて明白にして不動の信念あること、その目的を良心的に把握してゐること、精神が健康で良心が確立してゐることである。つまり精神の健康と云ふことが根抵となる。その時、人々は敵の神經戰に煩はされることもないわけである。

## 五、眞の勝利者道

私は近頃、西洋古代史上で有名なポエニ戰爭に就いて讀み返して見て、その殘酷にして苛辣なる樣相が現代の戰爭に酷似してゐることに深甚の興味を覺えた。ポエニ戰爭とはイタリー半島を中心に勢力を張るローマと北阿に雄飛するカルタゴ（今日のチュニス邊）との間の地中海制覇を繞つての戰爭であつて、西曆紀元前二六四年から一四六年に至る、前後三回、實に百二十年に垂んとする長期葛藤の後に、遂にカルタコの首都は灰燼に歸して、ローマの大勝に終つたのであるが、その間カルタゴの猛將ハンニバルがスペインから出發してアルプスの險峻を超えてイタリー半島を席捲すると云ふ、實に大膽痛快なる戰法などあつて、誠に手に汗を握らせるものがある。戰爭は確にカルタゴの方に勝味はあつたのだが、ローマは巧妙悪辣なる謀略に依つて遂に最後の勝利を收めた觀がある。

カルタゴの炎上沒落を親しく目擊したローマ人ポリビウスの記すところに依ると、ローマの將

軍スキピオは燃え殘る廢墟の煙を眺めつゝ、ローマも亦何れの日か、このカルタゴと同じ運命の下に置かれるのではないかと涙を流しつゝ、かのトロイの都の炎上を謳つたギリシァの詩聖ホーマーの詩句をひそかに口ずさんだと云ふことである。然るに、スキピオのこの豫感は的中して、それから約六百年の後（西暦紀元四五三年？）にローマは北方蠻族ヴァンダルのために完全に掠奪せられ荒廢に歸して了つた。

とは云へ、私はこれ等二つの事實の間に因果應報的な、勸善懲惡的な、神の攝理的な關係があると云はうとしてゐるのではないのだ。私はそれほど道德や宗教中心の神祕的世界觀を持つてゐるわけではない。私は根本的に科學者、殊に心理科學徒を以て自任してゐるのだ。で、私は右の二つの事實の中に或る程度までの心理的關係を認めようとする方に傾いてゐると云ふことを告白するに止めねばならない。

ローマがカルタゴを何ら大義名分的理由なしに、カルタゴの方から下手に出た度々の妥協案に拘らず、たゞ自分等と利害に於いて反すると云ふだけの理由でこれを絶滅させてしまつたと云ふ沒良心的行動と、彼自身が六百年後に北方蠻族のために同じやうな運命を負はされたと云ふ事實との間には、恐らく直接的な關係はないであらう。その關係は常識的に見る限りでは、單なる偶然的なものであるだらう。併しローマが文化的に低級な北方蠻族のために掠奪されねばならなく

感との間にも何らの心理的關係がなかつたとまで主張するものがあるならば、それは確に云ひ過ぎである。否、私はその間に必然的關係があると認めようとする方に傾いてゐることを告白せねばならぬ。何故か？　現に見よ、紀元六十四年にはかの有名な暴帝ネロが自分の都たるローマに自ら火を放つて六日六晩燃え續けるのを、彼は自作の詩篇「トロイの掠奪」を歌ひつゝ宮殿の高臺上から打眺め、その紅蓮の刧火を享樂してゐたと云ふではないか。このやうな變態的行動の心理的動機の中に果してローマ市民の歷史的罪過（カルタゴへの殘虐）による無意識的な自己懲罰願望が全然參與してゐなかつたと何人が斷言し得るか。私は心理學徒としてその間に密接な關係を想定しないわけに行かない。刧火を享樂しつゝ彼が「トロイの掠奪」を自作自論したと云ふ事實と、スキピオがカルタゴの刧火を眺めつゝホーマーの「トロイの炎上」の條を口誦しつゝローマの將來を思ふて流涕した時の罪惡感との間に何らの民族罪惡史的關係がなかつたと公言し得る者が一人でもあるであらうか。ネロはローマ市民の歷史的罪惡感の代表的告白者、贖罪者であつたと認めることの極めて自然なるを思ふ。

大體に於いて同じことは、わが國の歷史に於いて平氏を殘酷に絕滅させてしまつた源氏一族の精神史の中にも認めることが出來るのではないかと思ふ。平家を絕滅させたことの罪惡感は確に

源氏一族に於いて相當に根深いものがあつたと私は想定してゐるものである。一般の民衆が永くこの平家滅亡の恐怖や罪障感を頒前してゐたことがこれを半ば證明するものであると云へよう。現に平家の滅亡や殘黨や亡靈に關する題材の極めて多くが、わが國民文學や傳說や口碑の中に——例へば「船辨慶」の如き——遺されてゐる。由來、日本中世に於いては源氏と平家とが交互に擡頭して勢威を張るのだと云ふ一種の歷史觀的信念が民衆や歷史家の間に根強く浸込んでゐて、『愚管抄』などはその思想を明白に代表する史書の一つであると云はれてゐる。京都を中心として西は平家の地盤、東は源氏の勢力範圍と考へ、兩方から交互に選手が擡頭し登場すると云ふ形式により歷史が正當に進展すると信ぜられてゐたやうである。かくて西方の平氏が一時勢力を得てまた衰へて來ると、次には、東方の源氏がそれにとつて代ると想定せられてゐたやうである。その交互的な運命の調和を攪亂して了つたのは、壇の浦の悲劇であつて、これは單に一平家の悲劇たるに止まらず、廣く日本民族史上の罪過であつて、そのために歷史的動きの要が破綻したかのやうに恐怖せられたものゝやうである。さう云ふ民族的な恐怖や罪障感がその責任者たる源氏の人々の心理中に一層根強く行亙つてゐなかつたと何人が保證し得よう。私にはあの慘澹たる源氏の末路が、殊に實朝によつて代表せられたる諦觀的な態度が、その罪障消滅的意圖を無意識の內に發現して居るものであると見ることも、必ずしも無理な見方でもないやうに思はれてならな

いのである。頼朝はその少年時代に平家に捕へられて清盛はこれを殺さうと思つたのであつたが清盛の母がその生命乞ひをしたので、伊豆の小島に流罪に處せられたことは歴史に明記してあるところで、云はゞ彼は平家に恩を負ふてゐるのだが、然るにその恩を仇で報いて、今度は自分が勢力を掌握した後に、平家一族の者等はこれを完全に絶滅させて了つたのだ。かくてその報いは已れの上に返つて來て、鎌倉は三代にして完全に絶滅して了つた。否、頼朝自ら已れの弟等を亟つぶしに殺して了つた。その頼朝の無意識的意圖を宛も完全に繼承したかの如く、その妻政子はわが子たる源氏の胤を亟つぶしに絶滅させてしまつた。これが果して眞の勝利者の道であると云へるであらうか。これは覇道であつて眞の勝利者道ではない。

覇道はこのやうに、一時的には勝つてもそれは最終的な勝利者道ではなく、結局は意識せざる敗北主義的な道である。西洋には東洋で云ふやうな王道、皇道はない。何れもみな、覇者の道のみである。それ故に興亡は常ない有様であつて、わが國の皇道に見られるやうな永遠の種族保存の道はないのである。覇道と皇道との別は、覇道が相手の排斥と絶滅とを目的とするに對し、皇道は相手の武力のみ破碎して精神的に敵を救濟せんとする意圖を含んでゐるところに存する。

ローマのカルタゴに對する覇道的闘爭の傳統は今日にまで繼承せられ、アメリカが今やそれを實施しつゝあるのだと云へる。故に私は云ふのだ、アメリカは一時的には或は勝つことがあるか

も知れないが、結局は自壞するにきまつてゐるのであると。たゞ我々はその一時的な勝利をも彼等に許すまいとして懸命の努力を拂ひつゝあるのだ。併しその努力の陰には、我等の道が眞の勝利者道であるとの絕對の信念が强く固く裏付けられてあらねばならぬと云ふのである。

『神經戰對策』本文終

昭和十九年九月十日印刷
昭和十九年九月廿日製本

『神經戰對策』六〇〇部印刷
以印刷代謄寫　（非賣品）

著者　大槻憲二
東京都本郷區駒込動坂町三二七

發行者　東京精神分析學研究所代表　大槻憲二

印刷者　東京都板橋區板橋町三ノ六四　長谷川隆士

發行所　東京都本郷區駒込動坂町三二七
東京精神分析學研究所出版部
振替東京七八八一七番
電話駒込二八一一番

昭和十六年[illegible]月[illegible]日印刷
昭和十六年[illegible]月[illegible]日發行

[illegible]

973
269

자2卞71